

日本緑化工学会 コミュニティレター

Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology



第1号 2025年1月27日 発行

日本緑化工学会に新たな刊行物が誕生しました。コミュニティレターは、学会員向けの大会などの情報はもちろん、研究部会の活動や学会員のフィールドなどを紹介していきます。年3回の発行を通して、学会員の皆様の情報共有・交流の新たな場になることを目指しています。

なぜ表紙に豚汁？と思うかもしれませんが、私たちが大事にする緑地と実はつながりがあります。その不思議なつながりは、研究ノートのコラムで紹介されています。学会員の皆様からも原稿を積極的に提供していただき、このコミュニティレターを通して、豚汁と緑地のように、会員同士の多彩なつながりが生まれていくことを期待しています。

目次

コミュニティレター創刊に寄せて 高橋輝昌……………2

第56回日本緑化工学会 大会研究発表申込みのお知らせ……………4

第56回日本緑化工学会大会 案内（第1報）……………6

研究ノート：自然環境下で食べると何故美味しく感じるのか？ 岩崎 寛……………10

緑地探訪：大岐海岸の海岸林 中島有美子……………12

新会員の自慢：緑化工でネイチャーポジティブ 中村 剛……………13

書 評：図説 日本の森林 森・人・生き物の多様なかわり……………15

第18期第5～7回理事会議事録…16 第18期第1回評議員会記録…25 令和6年通常総会の開催…27

令和6年通常総会資料…28 会員の異動…48 賛助会員名簿…49



<巻頭写真>

森林セラピープログラムでの食事の様子（2008年撮影）

奥多摩セラピートレイルを活用した森林セラピープログラムでは、散策によるセラピー効果だけでなく、地元の食材を食べて「味覚」も刺激する、五感をフルに活用したプログラムを企画し、実践した。何気ない料理でも屋外で食べるととても美味しく感じるのです。

（岩崎寛、PIO-11の研究ノート参照）

コミュニティレター創刊に寄せて

会長 高橋輝昌

コミュニティレター創刊号をお届けいたします。この新しい刊行物を全会員で立派に育てていきましょう！

日本緑化工学会では、学会から会員への情報発信の改革を進めてきました。すでに、今年度（50巻）から、日本緑化工学会誌は完全電子化、すなわち J-STAGE 上だけで公開されています。

この学会誌の電子化には、学会の財政健全化という目的もありました。学会誌の完全電子化により、学会誌の刊行費用は大幅に削減され、今後の財政健全化が期待されます。

学会誌の完全電子化によって、これまで学会誌に掲載されていた巻頭の色紙ページ、学会記事や一部のコラム等が学会誌に掲載されなくなりました。学会誌に掲載されなくなるこれらの記事は、学会から会員への連絡手段としても活用されてきました。このため、学会誌の電子化に伴う会員への連絡手段を維持する必要性が生じた、というのがコミュニティレター創刊の目的の一つ目です。

また、電子化以前の学会誌は広告の媒体でもありました。広告を掲載することによる広告収入は日本緑化工学会の収入源として大きな部分を占めます。学会誌の電子化によって学会誌刊行費用を削減できても、広告収入を失うのでは財政健全化の効果が薄れます。このため、確実に会員の目に触れる広告媒体を維持する必要性が生じました。これがコミュニティレター創刊の目的の二つ目です。

私はこの二つ目の目的をいかに達成するかがコミュニティレターの浮沈を左右すると思っています。学会内のコミュニティレターに関する検討の中で、コミュニティレターを「読まれる刊行物にする必要がある」という意見が強く出されました。読まれなければ、広告を掲載しようとする団体が減り、学会誌の電子化でもたらされた財政上の利点も失われかねません。

学会が持つ会員への連絡手段としては、「ニュースメール」があります。ほとんどの連絡はニュースメールだけで（あるいはホームページを併用することで）事足ります。したがって、コミュニティレターは、ニュースメールには載らない要素を盛り込んだ、すべての会員が発行を楽しみにするような刊行物になる必要があります。

前述のとおり、このコミュニティレターには広告媒体を確保する目的があります。学会誌やホームページなどに広告を載せてくださる団体の多くは賛助会員です。これまでの学会誌では、個人会員や学生会員に比べ、賛助会員が広告以外で情報発信する場面は少なかったように思われます。コミュニティレターは多くの会員、特に賛助会員の自由な（ただし、緑化工学に関わる）情報発信・意見交換の場としても大いに活用されるべきです。

このたびのコミュニティレターは、まだまだ「外枠」ができたという段階にあります。これから会員全員で、コミュニティレターを楽しい刊行物に発展させていきましょう。

3つの特長で強酸性土壌を長期的に緑化!

強酸性土壌では…

pHとは 土中の水素イオン濃度の事。
水素イオン濃度が高い程、pHが低くなる。

酸性土壌

土壌のpHが低くなると肥料吸収などが抑制され、植物の生育が阻害される。

グリーンスラッガーを使うと!

1 転炉スラグ 2 フルボ酸 3 耐酸性種子

中和 土壌改善 生育促進

- 1 転炉スラグ** により
土壌改善 (中和効果)
転炉スラグが酸性土壌を中和し、
植物の育ちやすい環境に!
ミネラル分も豊富に含まれます。
- 2 フルボ酸** による
生育促進
フルボ酸が肥料分を
キレート化し、ミネラルの
吸収効率UP!
- 3 耐酸性種子** の
活用
酸性環境に強い種子を
活用する事で、長期的な
緑化を可能にします!

12 つくば市
つくば市

13 東京都
東京都

15 東京都
東京都

9月 施工5か月後

4月

【静岡県】
pH / 3.0
勾配 / 1:1.8
土質 / 礫混じり土

グリーンスラッガー フルボシリーズ

pH 3.0~5.0 の強酸性土壌の緑化に!

GREEN SLUGGER SERIES

第4回「エコプロアワード」奨励賞受賞
第6回「ジャパン・レジリエンス・アワード」
優秀レジリエンス賞受賞



前田工織株式会社

東京本社 / 〒105-0011 東京都港区芝公園2-4-1
東京営業部 芝パークビルA館12F
TEL.03-6402-3944
福井本社 / 〒919-0422 福井県坂井市春江町沖布目38-3
福井営業部 TEL.0776-51-9200

プラスチック製ラス網

プララス網

新技術情報システム (NETIS) 登録番号 HK-240004-A

吹付工に用いるプラスチック製のラス網です。
繊維製ネットのため、軽量で防錆性・付着性に優れ、
従来の亜鉛メッキ鉄線製の菱形金網の代替として使用できます。

特長 1 軽い
200g/㎡と軽量で、
設置作業等の負担が
軽減されます。



特長 2 錆びない
耐薬品性のある
化学繊維で構成
錆が発生しません。



特長 3

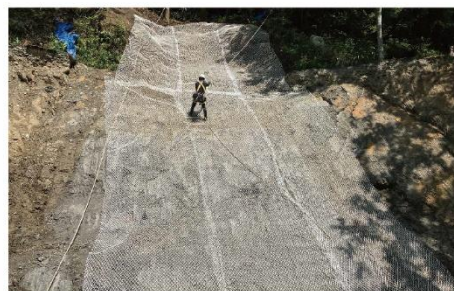
付着性抜群

ネット材にパイルを有しているため、
モルタルが絡みやすくなり付着します。



独自の技術
このループ状が付着のポイント

モルタルが
しっかり
付着して
液だれしない



第56回 日本緑化工学会 大会研究発表申込みのお知らせ

日本緑化工学会編集委員会

委員長 岡 浩平

副委員長 今西亜友美（論文部門）

副委員長 山瀬敬太郎（技術報告部門）

第56回日本緑化工学会大会は、2025年9月8日～10日に京都大学にて開催される予定です。皆様の積極的なご参加をお願いいたします。なお、大会開催の詳しいお知らせや研究集会開催および資材・工法等展示の申込み等につきましては、学会HPや会員news-mailにて案内いたします。

1. 発表の取扱いについて

発表は「論文部門」と「技術報告部門」と「研究交流発表部門」に分けて行います。大会特集号に論文や技術報告が掲載された場合は、大会での発表が義務づけられますのでご注意ください。なお、大会の開催形式や発表形式などは、詳細が決まり次第、学会HPなどで案内いたします。

「研究交流発表部門」は、緑化に関する話題提供とそれによる議論や研究交流を目的とした発表で、A4サイズ1頁程度の簡単な要旨の提出で発表に臨んでいただくことができます。学生や企業の若手研究者・技術者、緑化以外の分野からの申し込みにも期待しています。

なお、研究交流発表部門への申込方法等は、今後、大会運営委員会より学会HPなどにて案内いたします。

2. 「論文部門」「技術報告部門」への発表申込方法

- (1) 発表申込者は、学会HPに掲載の方法に従ってお申し込みください。
- (2) 発表原稿は学会HPの「投稿規程・執筆要領」に従って作成してください。投稿については、オンライン投稿システム（Editorial Manager：<https://www.editorialmanager.com/jsrt/>）からの投稿となっています。学会HPの原稿テンプレートをダウンロードして、原稿を作成してください。
- (3) 論文は一編につき15,000円、技術報告は同10,000円の掲載料が必要です。支払い方法は、別途案内します。

論文申込み締め切り	2025年2月17日（月）	【必着】
論文原稿締め切り	2025年3月 5日（水）	【必着】
技術報告申込み締め切り	2025年4月14日（月）	【必着】
技術報告原稿締め切り	2025年5月 7日（水）	【必着】

[問合せ先：論文部門]（大会運営委員会とは異なります）

〒577-0813 大阪府東大阪市新上小阪228-3 G館

近畿大学 総合社会学部 環境・まちづくり系専攻（気付 今西）

日本緑化工学会 大会特集号編集委員会（論文部門）

TEL：06-4307-4168 FAX：06-6721-2512

E-mail：jsrt56.ronbun@gmail.com

[問合せ先：技術報告部門]（大会運営委員会とは異なります）

〒671-2515 兵庫県宍粟市山崎町五十波 430

兵庫県立農林水産技術総合センター 森林林業技術センター（気付 山瀬）

日本緑化工学会 大会特集号編集委員会（技術報告部門）

TEL：0790-62-2118 FAX：0790-62-9390

E-mail：kei-yamase@nike.eonet.ne.jp



フジミン Forest

植物活性剤フジミン®の
固形化資材

■ フジミンForestとは

国内の森林資源を原料に製造している植物活性剤「フジミン®」を固形資材化したものです。
森林土壌に存在する腐植物質「フルボ酸」を含有しており様々な効果を発揮します。

肥料吸収の効率化

土壌pHの緩衝作用

光合成の活性化

土壌の団粒化促進

持続性の向上

降雨でゆっくりと溶けることでフルボ酸が時間をかけて土壌に浸み込むため、液体資材のフジミン®よりも効果の持続性が向上しました。

施工性の向上

フジミン®は水で500倍に希釈して使用する必要がありますが、本製品は希釈する必要がないため施工性が向上しました。



10mm

持続性が
高い



5mm以下

ドローンでの
散布が可能

■ 効果確認試験

ヨモギとバミューダグラスを播種し、フジミンForestを入れた培地と入れない培地で生育を観察。
開始から2週間で写真のように差が生じ、フジミンForestの効果を確認しました。



フジミンForestなし



フジミンForestあり

POINT

フジミンForestを投与した
培地は、ヨモギやバミュー
ダグラスが徒長することな
く、全体に満遍なく生育し
ています。



国土防災技術株式会社

事業本部 環境事業部 緑環境事業課 〒105-0001 東京都港区虎ノ門3丁目18番5号

TEL: (03) 3432-3567 (代) FAX: (03) 3432-3576 MAIL: green@jce.co.jp URL: https://www.jce.co.jp/

「第56回日本緑化工学会大会」案内（第1報）

第56回日本緑化工学会大会運営委員長 今西 純一

第56回日本緑化工学会大会を下記のとおり開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

1. 大会概要

(1) 日程：2025年（令和7年）9月8日（月）～10日（水）

1日目 2025年9月8日（月）

午前～午後	大会受付開始 開会挨拶，口頭発表，研究集会 ポスター発表（論文，技術報告，研究交流発表），資材・工法展示 総会，学会賞授賞式，シンポジウム
夜	情報交換会

2日目 2025年9月9日（火）

午前～午後	口頭発表，研究集会 ポスター発表（論文，技術報告，研究交流発表），資材・工法展示 評議員会，優秀ポスター賞授賞式
-------	--

3日目 2025年9月10日（水）

午前	現地見学会（大阪・関西万博会場）
午後	各自で自由見学

(2) 会場

- 1日目 京都大学芝蘭会館・別館（京都市左京区吉田近衛町・吉田牛ノ宮町）
京都大学生協同組合吉田食堂（京都市左京区吉田本町）
- 2日目 京都大学芝蘭会館・別館（京都市左京区吉田近衛町・吉田牛ノ宮町）
- 3日目 大阪・関西万博会場（大阪市此花区夢洲）

2. 参加費・参加申込方法

後日，ご案内いたします。

3. 企業展示（資材・工法展示）

緑化用資材，緑化方法，分析・調査器具および図書等，緑化に関する技術及び商品の展示を募集いたします。
多くの皆様のご出展をお待ちしています。

申込方法については，後日，ご案内いたします。

4. 研究集会

緑化に関わる研究集会の開催を募集いたします。申込方法については，後日，ご案内いたします。

5. シンポジウム

「緑化の未来を拓く！森林・草地生態系における植物群集形成の科学」

2025 年 9 月 8 日（月）午後

生物多様性保全への意識の高まりとともに、緑化においても生物多様性への配慮がより一層求められるようになっていきます。これまでに地域をモデルにして樹林や草地の形成が行われた事例はありましたが、今後はそのような事例が増えて行くと予想されます。様々な緑化の手法が開発され、取り扱い実績のある植物の数も増えてきている中で、緑化によって形成可能な植物群集も多様になり、地域の自然をモデルにした緑化も実現しやすくなりつつあります。しかし一方で、目標とする植物群集を確実に形成できるという段階にはまだ至っておらず、実現には様々な課題を抱えています。本シンポジウムでは、森林生態学や草地生態学の分野で活躍する研究者を迎え、地域の自然をモデルにした緑化における目標設定、緑化や植生管理のあり方、実践事例についてご講演をいただいた後、討論を行います。植物群集形成の科学という視点から、緑化の未来を見据える機会にしたいと思います。

司会・趣旨説明	今西純一（京都大学）
講演 森林生態系の視点から	石井弘明（神戸大学）
講演 草地生態系の視点から	山田 晋（東京農業大学）
講演 実践事例とその課題	橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）
討論	

6. 現地見学会

「大阪・関西万博における未来の緑の活用と管理」

2025 年 9 月 10 日（水）

(1) 概要

2025 年日本国際博覧会（大阪・関西万博）が大阪の夢洲で開催されます。現在、大阪では、JR 大阪駅、阪急・阪神・大阪メトロ梅田駅など交通の中心部でもある場所において、グラングリーン大阪やグランフロント大阪といった経済活動の大きな場を初め、緑豊かな空間づくりが産官学によって実装されてきています。また、大阪府内でも府営公園や市営公園の緑化の取り組みを初め、グリーンインフラの実装による緑の都市空間が作られてきています。

そのような中で今回開催される大阪・関西万博のコンセプトは「People's Living Lab 未来社会の実験場」です。「緑」にも着目されており、会場の様々な場において緑の利活用が推し進められています。本大会の現地見学会では「大阪・関西万博における未来の緑の活用と管理」をテーマに、これから先の未来の緑のあり方、利活用の仕方について見て学びます。加えて、夢洲という海上会場といった環境での緑の管理について見ていただこうと考えております。現地では、大阪・関西万博の管理運営を進めてきた公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会の担当者、また施工管理をしている企業の担当者から、それぞれ説明していただくことになっています。

未来に向けた大阪・関西万博の「みどり」を実際に会場で見えて感じましょう。

(2) 実施日時

2025 年 9 月 10 日（水）午前 現地見学会 午後 各自で自由に見学し解散

スケジュールの詳細は後日ご案内いたします。

(3) 募集人数

先着 40 名（予定）

(4) 申込方法

申込方法については、後日、ご案内いたします。

7. 研究発表の種別と申し込み

(1) 発表の取扱いについて

例年、日本緑化工学会研究発表会の発表は、学会誌大会特集号への投稿が必要な「論文部門」と「技術報告部門」での発表と、学会誌への投稿を必要としない（要旨の提出は必要）「研究交流発表部門」の3つに分けて行われます。

■論文部門と技術報告部門の発表・学会誌への投稿

論文部門と技術報告部門の発表・投稿申込については、大会特集号の募集案内をご覧ください。

■研究交流発表部門の発表募集

(1) 研究交流発表部門とは

より多くの会員に発表と意見交換の場を提供するために、学術的あるいは応用技術的な緑化に関わるさまざまな話題を募集します。発表はポスター形式のみとし、発表者にはポスターの他 A4 用紙 1 ページの要旨作成が求められます。これらのポスター・要旨の校閲審査はありません。

(2) 発表資格

日本緑化工学会正会員、学生会員および賛助会員組織に属する方に限ります。また、連名の場合には筆頭者が正会員、学生会員および賛助会員組織に所属する方が必要です。

(3) 申込方法

申込方法については、後日、ご案内いたします。

8. 優秀ポスター賞

(1) 優秀ポスター賞とは

日本緑化工学会では若手研究者および若手技術者を奨励するため、若手会員を筆頭者とするポスター発表を対象として、日本緑化工学会大会に相応しい優れたポスターを、論文部門、技術報告部門、研究交流発表会のそれぞれから選出し、大会期間中に表彰いたします。応募者は、優秀ポスター賞表彰式までお残りください。

(2) 応募資格

優秀ポスター賞に応募するためには、筆頭発表者が学生会員であるか、大学卒業後あるいは大学院修士課程・博士課程修了後 5 年程度までの正会員であることが必要です。

(3) 応募方法

応募方法については、後日、ご案内いたします。

9. 宿泊

京都・大阪の会場周辺にホテルは多くありますが、行楽時期や他のイベント開催に重なりますのですぐに満室になる可能性があります。部屋を早めに確保することをお勧めします。

10. 大会運営委員会

委員長：今西純一（京都大学）

委員：貫名 涼（京都大学）、深町加津枝（京都大学）、福井 亘（京都府立大学）、

岡田準人（大阪産業大学）

それは、人を守る緑。

自然の植生を再生し、
地球環境を守る第一歩をお手伝いします

ロンタイ新製品のご案内

NEW

ロンケット 風来坊

～その飛来種子、「ワラ」が逃しません！～

自然侵入促進型製品「風来坊」がリニューアル！
ワラの凹凸が飛来種子を逃さずキャッチ！



- ワラの装着により
種子の捕捉効果がアップ！
- ワラが飛来・埋土種子を
保護し、生育を促進！

それは、人を守る緑。



株式会社

【本社】〒570-0011 大阪府守口市金田町3丁目1番11号

【TEL】(06)6902-9401 【FAX】(06)6905-9070

【支店・営業所】札幌・仙台・関東・静岡・大阪・四国・広島・福岡・鹿児島

【E-mail】info@rontai.co.jp 【ホームページ】https://www.rontai.co.jp



ロンタイは2022年9月1日、
SDGs宣言を行いました。



鹿食害対策一体型植生マット

クサマモール

鹿の食害対策に！

植生マットと対策ネットを一体化した工法です。

食害対策ネットは、植物の成長と共に持ち上がることで、植物を食害から守ります。さらに、食害対策ネットで守られた植物は、のり面を保護し植生工としての機能が保持されます。

鹿の踏み荒らし対策には

「アニマルガード工法」をおすすめします。

生育後イメージ

鹿食害対策ネット



対策ネットが植物を覆い、
鹿の食害から守ります。



施工後3ヵ月

詳しくは日本植生HPへ



太陽と緑の国づくり

日本植生株式会社

本 社：岡山県津山市高尾573-1

TEL 0868-28-0460 FAX 0868-28-4850

営業所：青森・盛岡・仙台・東京・神奈川・栃木・新潟・名古屋・
長野・金沢・大阪・岡山・広島・島根・高松・松山

研究ノート Research Note

自然環境下で食べると何故美味しく感じるのか？

岩崎 寛

千葉大学大学院園芸学研究院／緑・健康研究部会 (iway@faculty.chiba-u.jp)

子供の頃、キャンプで作るカレーが大好きでした。また、遠足やハイキングなど、自然空間で食事をした経験は今でも覚えており、不思議なことに、これら自然空間で食べた食事の記憶が、すべて美味しかったなあと懐かしく思い出されます。子どもの頃の記憶に限らず、大人になった現在でも、それらを体験している人は多いかと思えます。例えば、ここ数年ソロキャンプが流行っていますが、自然空間の中でゆっくり淹れたコーヒーは格別で、そのためにわざわざキャンプに行くというような人もおられます。

何故、自然環境の中で食べると、我々は「美味しい」と感じるのでしょうか。例えばキャンプで作ったカレーを家に持ち帰って食べた場合、同じように美味しいと感じるのでしょうか。どんなに上手に作れたとしても、あの自然環境の中で食べた美味しさとは少し違う気がします。コーヒーも、家に持ち帰って飲んでも、あの自然環境の中で飲んだ美味しさを味わうことができません。

同じ飲食物でも、屋外での食事が美味しく感じられるのは、食事をする「環境」や「風景（視覚的効果）」が、食事への「印象（味覚）」に何らかの影響を与えているのではないかと考え、以前、いくつか調査を行ったことがあります。

まず始めに、緑地や植物が視界に入ることによる味の印象への影響について実験をしました。実験はキャンパス内で窓から庭園を眺めることができる部屋で実施しました。庭の見える方が異なる4つの場所（①屋内：窓から庭の景色が見えない席、②屋内：窓から庭の景色が見える席、③屋外：庭の景色が見えるテラス席、④屋外：庭の中に設置した席）を設定し、それぞれの場所において市販されているペットボトルのお茶を飲んでもらいました。そして、それぞれの場所において感じた味の印象（主観評価）をSD法によって評価してもらいました。その結果、庭の景色が全く見えない①よりも、庭の景色が見える②から④の席でお茶を飲む方が、お茶の味に対して「健康的な」「贅沢な」「やさしい」「上品な」といった印象を持つことがわかりました（図-1）。このように、同じ味のお茶を飲んだとしても、飲む環境・見える景色によって味に対する印象が変わり、庭の景色が見える場所の方が、見えない場所に比べ、味に対してポジティブな印象を持つことがわかりました。また、庭の景色がみえる環境である②から④の間で比較すると、「好きな」や「調和した」といった項目においては、④のように完全に庭の中に入って飲むよりも、③のようなテラス席の方が良い印象を持つことがわかりました。その理由を調べるために、被験者にヒアリング調査を実施しました。その結果、④の様に緑地の中に入りすぎてしま

うと、食事環境としては落ち着かないことや、③の様なテラス席は建物が側にあることによる安心感があることなどがわかりました。よって、食事において緑地が見えることは食事が美味しく感じられる大事な要素ではあるが、必ずしも緑地との距離が近い方が良いわけではなく、適度な距離があることも食事空間としての心地よさを保つ重要な要件であると考えられました。緑によるセラピー効果に関していえば、緑との距離が近い方がより有効であると言えますが、食事空間として考えた場合は少し異なるようです。実際に窓から緑地が見えるようなお店では、窓際の席から予約が埋まることや、公園にあるカフェなどでも、天気の良い日であればテラス席を選ぶ人が多くなります。このような様子からも、適度な距離を保った自然の風景は、食事を美味しいと感じる重要なスパイスになっていると言えます。

このように風景は食事に対する印象に影響を与えることがわかりました。しかし、緑のある空間であれば、どのような風景でも美味しく感じるのでしょうか。例えば、「京都の寺院に行き、庭を眺めながら何かを飲む」というシチュエーションでは、普段は飲まなくても抹茶や緑茶が飲みたくなりますし、美味しいと感じます。つまり、「その場所で、何を食べたか」という「空間」と「飲食物」の組み合わせ、マッチングも味覚に影響を与えていると考えられます。そこで、次に空間と飲食物のマッチングについて調査を実施しました。10代から70代までの合計128名に対し、日本庭園やお寺などの「伝統的な空間」、牧場や果樹園など「味覚関連の空間」、山や川、海などの「自然空間」、都市公園などの「多目的空間」

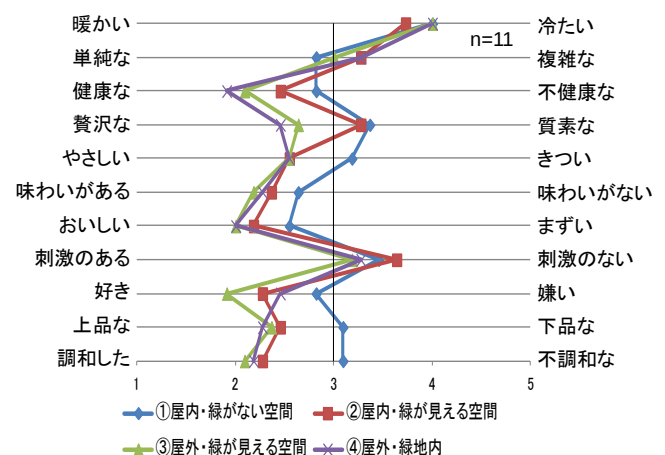


図-1 各場所で飲んだ際のお茶の味に対する印象プロフィール (SD法) n=11

の4つの空間において、それぞれの空間で飲みたい物、食べたい物についてのアンケート調査を行いました。その結果、飲みたい物の傾向は4つの空間で異なっており、日本庭園や牧場では、飲みたいものが限られており、日本庭園では7割近くの人が「抹茶」(図-2)、牧場では「ミルク」という回答でした。一方、河川敷や都市公園では、特定の飲み物に偏っていませんでした。特に都市公園においては、その傾向が強く、いろいろな飲み物が選ばれていました(図-2)。この結果から、伝統的な空間や味覚関連では、その空間に対する「イメージ」と「飲食物」が強く関連し、選択する飲食物が限定されるのに対し、自然空間や都市公園などの多目的な空間においては、その空間に対するイメージが個人によって異なり、特定の飲食物と関連しないことがわかりました。つまり、都市公園のベンチに座って景色を眺めながら飲みたい物は、空間の特性で選ばれることよりも、自分の嗜好性や、その時の気分などで選ばれることから、風景の持つ印象と食が必ずしもマッチングしていないと言えます。それに対し、「京都のお寺でお庭を眺めながら飲む抹茶は、この雰囲気に合わせていいね」や「牧場の広大な景色を眺めながら飲む絞った牛乳は、この雰囲気に合わせていいね」という感覚は、風景の持つ印象と食が合っている(マッチしている)ことから、多くの人が共感できる「美味しい」に結びつくのではないかと考えられました。視覚的な空間と食のイメージがマッチすることで、人は【安心感】を感じ、それが【美味しさ】に繋がるのです(図-3)。

よって、この感覚を得るには、それらの空間と食に関するマッチングの経験や知識が必要になってきます。例えば、日本人にとっては、「京都のお庭と抹茶」が視覚的な空間と食のマッチングとして、経験や知識としてイメージできますが、それらの情報が全くない外国の方にとっては、「京都のお庭でコーラ」など、抹茶以外の飲み物が嗜好性で上げられる可能性が高いと考えられます。ただ、最近では SNS の普及により、海外の方でも、容易に伝統文化に関する情報を得ることがができますので、より日本文化に接したいと感じる人は抹茶を注文されるようになっていきます。

私も同じような体験がありました。15年ほど前、韓国に清溪川の調査に行った際に、近くの寺院に立ち寄りしました。その時、我々は知識や経験がなかったので、境内にある売店で普通にお茶を注文しました。しかし、地元の方々が飲んでいたのは、「シッケ」という飲み物でした。あとで調べると、シッケは麦芽粉とお米で作られた韓国の伝統的な飲み物でした。それを知った上で、数年後韓国に行った際に「シッケ」を飲みながら、韓国庭園を眺めてみると、不思議とその風景に寄り添った印象が得られて美味しく感じ、今も記憶に残っています。

このように風景と味覚は情報や記憶、経験を通じて密接な関係にあると言えます。緑化の目的は色々ありますが、人が食事を美味しく感じる空間を緑で創出・演出できる可能性もあるのです。

緑・健康研究部会では、「癒し・ストレスケア」といった観点だけでなく、「食」という観点からも健康に寄与できる緑についても議論できればと思っています。

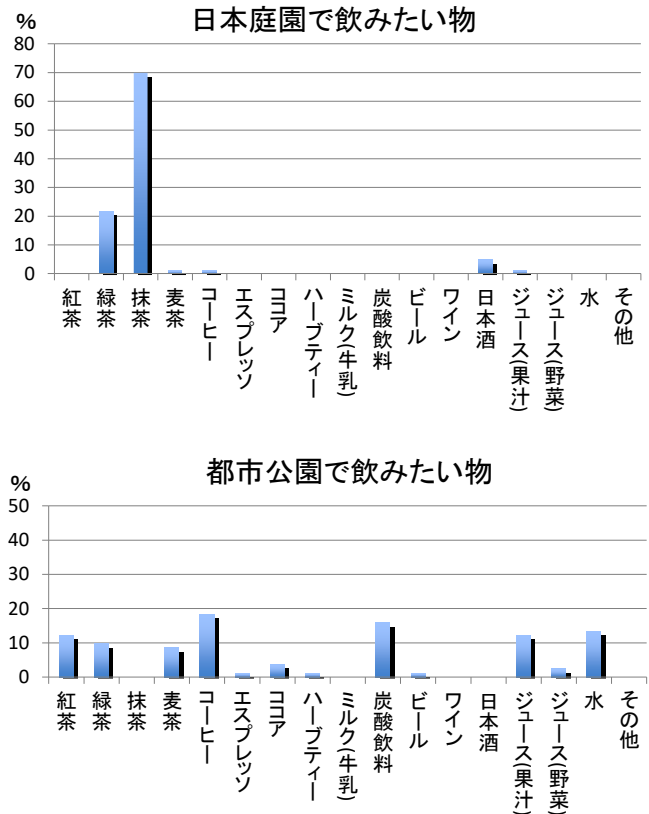


図-2 各場所で飲みたい飲み物 (複数回答) n=124

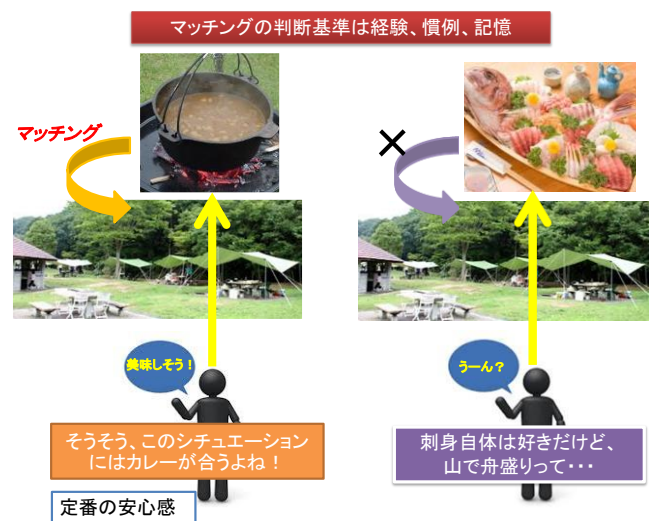


図-3 景観とマッチングの関係

参考資料

- 1) 岩崎 寛 (2011) 美味しい風景学：自然環境下で食べる と何故美味しく感じるのか、食生活科学・文化及び環境に関する研究助成研究紀要 (アサヒビール学術振興財団), 26:59-66.

緑地探訪 大岐海岸の海岸林（高知県土佐市）

中島有美子

国際航業株式会社 (y.nakajima213@gmail.com)

大岐海岸の海岸林は高知県土佐清水市の大岐海岸に位置する広葉樹からなる海岸林である。大岐海岸は約 1.6 km の海岸砂丘地で、幅約 100 m の砂浜があり、砂浜に隣接して林帯幅約 200 m、延長約 1.3 km の海岸林が成立している。

この海岸林で最も印象的だったのは樹木の大きさであり、林帯の内陸側では樹高 20 m、胸高直径 1.5 m を超えるクスノキやタブノキなどの巨木が生育していた。自分が調査してきた広葉樹の海岸林では、大きな個体でも胸高直径は 40 cm 程度だったので、とにかくその大きさにまず驚いた。また、広葉樹の海岸林は潮風等に晒され細々と樹冠を広げているような個体が多い印象があった。大きく樹冠を広げている巨木の下に立つと、ここが海岸林であることを忘れそうだった。

大岐海岸の海岸林の歴史をみると、江戸時代初期はマツが植栽されたとされ⁴⁾、1906 年の地形図³⁾では海岸林全体が針葉樹とされていることから、当初は海岸林全体がマツ林だったものと考えられる。その後、マツは 1950 年代頃よりマツ材線虫病により大量枯死したとされ²⁾、地元住民によると 2006 年頃にマツはほぼ消失したという。現在生育する広葉樹は、汀線側の幅約 30 m の範囲に植栽されたトベラ、シャリンバイ、マサキ等からなる低木林を除いて植栽記録はないことからほぼ自然侵入したのと考えられる。

林内を歩くと優占種や林分構造が汀線側から内陸側に向かい変化することが分かる。高木層の優占種は低木種からヒメ

ユズリハ、ヤブニッケイ、クスノキ・タブノキと主に移り変わっていく。また、林分構造は汀線側の身動きが全くとれないほどの高密度で樹高の低い林分から、徐々に低密度で樹高の高い林分に変化する。こうした相観の違いについて、森定²⁾は植生調査や過去の空中写真の判読等から、マツ材線虫病とその後の森林管理の違いが影響していることを示している。

広葉樹の海岸林は従来のマツの海岸林と比較して、潮風等に対する耐性が低く、防災林としての機能が維持できるかが懸念されている。様々な歴史を経て、本来の生育環境ではないと考えられる砂浜に見事に成立しているこの海岸林が、今後どのように変化していくのか見ていきたいと思う。

引用文献

- 1) 松岡泰洪 (1992) 大岐浜林裁判資料, 大岐浜林被告橋本 田鶴子さん (その他有志) を支援する会, 391pp
- 2) 森定 伸・野崎達也・小川みどり・鎌田磨人 (2020) 高知県大岐浜におけるクロマツ林から照葉樹林への遷移過程, 景観生態学会誌, 25(1): 75-86.
- 3) 参謀本部陸軍部測量局 (1906) 五万分一地形図土佐清水. 1pp
- 4) 土佐清水市史編纂委員会 (1980) 土佐清水市史下巻. 1046pp



写真左：上空から臨んだ大岐海岸の海岸林。写真右上：林内の踏査の様子。写真右下：巨木が楽しめる散策路もある。



緑化工でネイチャーポジティブ ～より良い自然を次の世代に残したい～

中村 剛 1,2)

- 1) 日本植生株式会社 info@nihon-shokusei.co.jp
2) 大阪公立大学大学院農学研究科



1. はじめに

先般、編集委員長から「コラム・会員の自慢」のリニューアルと、その初回の執筆について打診を受けました。企業や組織・団体に限定することなく、各会員の取り組みを気軽に発表できる場として、再出発したいとの旨でした。名だたる先輩方をさしおいて、何故に私が？との思いもありましたが、ここで断りしても、編集委員長を困らせるばかりだと思い、僭越ながらお受けすることとしました。

今回に続くこのコラムが、幅広い層の会員の交流の場となることを期待して、まずは砕けた文体で書いてみたいと思います。

2. 勤務先の日本植生について

私が勤務する日本植生株式会社は岡山県津山市に本社を構える緑化企業です。「緑の国づくり」を目指して、昭和26年の創業以来、法面緑化工事や治山事業に用いる各種緑化製品の開発・製造販売と斜面緑化・斜面防災技術の開発・設計施工を全国で手掛けています。また、近年は、河川護岸や都市緑化にも力をいれています。詳細は弊社ホームページ³⁾をご覧ください。第32巻4号の本コラムにも紹介されています。

日本植生は、過去より海洋緑化や屋上緑化をはじめとする、様々な緑化技術の開発に取り組んできました。私が入社した1990年代には、生物多様性に配慮した緑化手法の研究開発に着手し、後に表土利用工と自然侵入促進工を実用化しました。「表土利用工」は、購入種子に代えて森の土に含まれる埋土種子を用いることによって、現地に生える植物で緑化をする手法です。また「自然侵入促進工」は、のり面に侵食防止の処置と植生の基盤造成を施す（種は使わない）ことで周辺からの植物の侵入を促す緑化手法です。今ではこれらに、現地で採取した種を用いて緑化する「地域性種苗利用工」を加えた、3つの緑化手法が、自然公園をはじめとする自然保護地域でのスタンダードとして採用される時代を迎えています。

3. 私と日本緑化工学会との関わり

表土利用工や自然侵入促進工の開発は、基礎研究の占める部分が多く、日本植生では、東京農工大学の亀山章教授や京都大学の森本幸裕教授（いずれも当時）をはじめとする何人もの先生方の指導や協力を得ながら、随分と学術的なスタイルで開発を進めていました。そうした中で、当時の上司の勧め

めもあり、兵庫県西宮市で実施した表土利用工（写真-1）の成果を日本緑化工学会の技術報告として、発表する機会を得ました⁴⁾。私にとって初めての学会発表であったため、投稿手続きから、執筆、審査対応に至るまで、森本先生と共著者である大阪府立大学（当時）の中村彰宏先生には、手取り足取り事細かなご指導を頂きました。今もって感謝してもしきれません。

この時発表した表土利用工は、その後「マザーソイル工法」として全国各地で実績を積むこととなります。表土利用工は、従来の緑化工法と異なり、地域や立地条件、環境、周辺植生によって、成立する植物群落が異なり、とても興味深いものでした。その後の5年間は、調査のたびに得られた新しい知見を技術報告として発表し続けました。

お陰さまでこの「マザーソイル工法」は、2010年に緑化工学会賞（技術賞）を頂くことができました²⁾。

4. 自然回復緑化の研究

表土利用工も自然侵入促進工も、施工後十年を経過すると、植生遷移が随分と進行します。樹木が背丈を伸ばし、階層構造ができつつある群落を各地で調査していると、どの程度の年数で、どのような経緯をたどりながら、最終的な緑化目標である周辺と調和した植生が成立するのかを科学的に明らかにしたい、などと考えるようになりました。こうした個人的な探究心に、社会的使命感と勤務先の理解支援が相まって、



写真-1 西宮市の表土利用工 施工後6ヶ月（2002年10月）

2013年には、大阪府立大学大学院（当時）の藤原宣夫教授の基で、本格的な研究に着手することとなりました。

以降、西日本において施工された表土利用工と自然侵入促進工の施工地を対象に植生調査を実施し、それまでに行った調査結果と併せて解析を行い、その結果を3編の論文として緑化工学会に発表しました^{5,6,7)}。また2017年に提出した博士論文「表土利用工および自然侵入促進工による裸地斜面の植生回復に関する研究」では、二つの緑化手法の使い分けや、周辺植生との調和の進行具合を評価する方法、適用した緑化方法の有効性を評価する指標などを提案し、予定より一年遅れで大阪府立大学から学位を授かることができました。なお、本研究内容の全文は、大阪公立大学学術情報リポジトリ (<https://omu.repo.nii.ac.jp/>) で公開されています。

5. 最近ハマっていること

学位取得後は、研究者から一技術者に立ち戻り、表土利用工の普及と、その土地本来の自然な植生の復元に取り組んでいます。森林表土は長い年月を経て作られた貴重な生物資源ですから、掘削土砂と一緒に埋め立て処分するのではなく、開発によって失われた自然の修復に有効活用しなくてはならないと考えています。

こうしたのり面緑化分野における取り組みの一方で、最近週末を利用して、自然再生活動に参加する機会が増えています（口絵写真、写真-2）。勤務地から程近い岡山県蒜山高原には、伝統的な山焼きによって維持されてきた草原や、その近隣に点在するいくつかの湿原が残されています。こうした放置すれば失われていく自然環境の保全・再生を目的として、2022年に蒜山自然再生協議会¹⁾が設立され、これに参加する数多くのボランティアが貴重な自然を守っていることを一昨年に知りました。当初は好奇心から参加したこの活動は、自然の再生力に多くを委ねる通常ののり面緑化と異なり、自然に対するより能動的な働きかけを行うものでした。「より良い自然を残したい」という思いを同じくする参加者との交流や情報交換はとても有意義なものです。

ここ蒜山には鳥取大学の演習林があり、私にとっては、学生時代に卒業研究のため足繁く通った思い出深い地域でもあります。植物について多くを学んだフィールドで、30年後の今も勉強ができることを感慨深く思います。

6. 今後の抱負

齢56歳、私もいよいよ人生の最終四半期を迎えました。残された時間はあまりありません。これまで、のり面に元あった植物群落を復元すること（時間もかかり、たやすいことではありませんが）をゴールと考えていましたが、自然再生活動に関わる中で、元あった状態よりも、さらに豊かな自然を残すことが、次の世代に向けた責務ではないかと考えるようになってきました。ネイチャーポジティブです。のり面緑



写真-2 自然再生活動（草原の草刈りと希少種保全）

化は、植被率や群落高さといった緑量によってのみ評価されがちですが、より良い自然を残すためには、質的評価にもこだわって行かねばなりません。生物多様性の保全を目指す技術者は、様々な自然環境にふれ、動植物を深く知り、自然の豊かさ複雑さを見抜く力を磨き続ける必要があります。これは自分自身の反省でもあります。

勤務先である日本植生株式会社では、30by30 アライアンスへの参画や、自社が所有する総合研究圃場の自然共生サイト登録の準備など、生物多様性の保全に向けた機運が一層高まっています。そうした中、今後はのり面緑化で培った経験をより幅広い自然環境の再興に活かすことができると考えています。微力ではありますが、お手伝いできることがありましたら、お気軽にお声掛けください。

参考資料

- 1) 環境省．“蒜山自然再生協議会”．環境省ホームページ．<https://www.env.go.jp/nature/saisei/kyougi/hiruzen/index.html> (参照: 2024年11月25日)．
- 2) 日本植生 (2012) 表土シードバンクを利用した吹き付け工法(マザーソイル工法)の開発とその検証, 日本緑化工学会誌, 37(3): 377-378.
- 3) 日本植生ホームページ. <https://nihon-shokusei.co.jp/>
- 4) 中村 剛・中村彰宏 (2003) 表土シードバンクを利用した施工事例の報告, 日本緑化工学会誌, 29(1): 197-200.
- 5) 中村剛・谷口伸二・大貫真樹子・藤原宣夫 (2014) 京都府北部における森林表土を利用した植生基材吹付工の植生遷移と自然回復の評価. 日本緑化工学会誌, 40(1): 8-13.
- 6) 中村剛・谷口伸二・大貫真樹子・藤原宣夫 (2016) 本州・四国・九州における表土利用工と自然侵入促進工の植生回復に関する研究. 日本緑化工学会誌, 42(1): 9-14.
- 7) 中村剛・谷口伸二・坂巻央・藤原宣夫 (2015) 中・四国および近畿地方における自然侵入促進工の植生遷移に関する研究. 日本緑化工学会誌, 41(1): 127-132.

書 評 BOOK REVIEW

図説 日本の森林 森・人・生き物の多様なかかわり

日本森林学会 編, 202 頁, 定価 4,800 円
発行: 朝倉書店 ISBN 978-4-254-18065-7

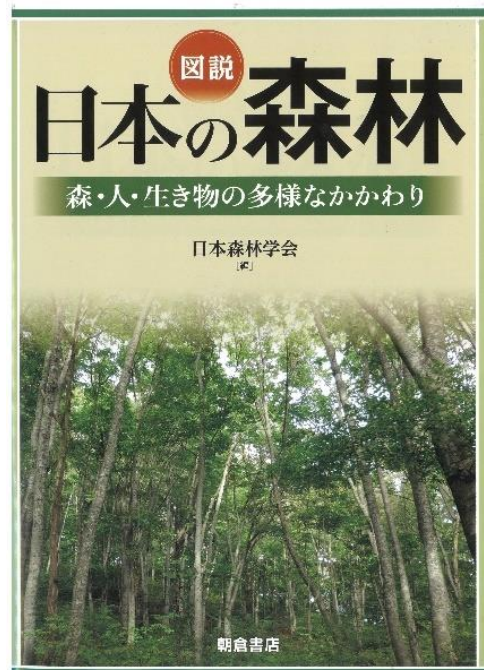
日本森林学会の編による「図説日本の森林 森・人・生き物の多様なかかわり」が 2024 年 10 月に出版された。

本書は、朝倉書店が刊行している、図説日本の樹木、図説日本の植生、図説日本の湿地等に並ぶものであり、総勢 122 名に及ぶ執筆陣が取り組んだ、日本の森林の多様な側面を読み解く図説となっている。内容は 3 部構成となっており、第 1 部は「森林を読み解く 136 景」、第 2 部は「生き物たちの森林」、第 3 部は「森林と人」である。刊行にあたっての前森林学会長の文中に、「人と森林のよりよい関係を追及する森林科学」という言葉が書かれているが、まさにこれを具現化する内容として、「森・人・生き物の多様なかかわり」が、豊富な写真や図によって示されている。

第 1 部の「森林を読み解く 136 景」では、北から南まで、日本を代表する森林 136 景の姿が、その森林を熟知した執筆陣によって描かれており、まさに日本を代表する森林のカタログとなっている。また、ここで取り上げられた森林は、屋久島等のように自然度の高い森林のみならず、人とのかかわりが強い森林も取り上げられており、日本の多様な森林の姿が示される。緑化工学会の会員にとっても馴染みが深いと思われる万博記念公園の森や、足尾荒廃地の森林再生、六甲山の再生林なども取り上げられている。多分、編者はこの 136 景を選ぶのに相当苦労したのではないだろうか？ 評者としても個人的に取り上げて欲しかった森林がいくつも頭をよぎる。編者もこのことは十分承知で、あとがきで、紙面の都合などで苦悩の選択であったことを述べている。読者それぞれが、思い入れのある森林の姿を頭に描きながら読むのも楽しみの一つである。

第 2 部の「生き物たちの森林」では、哺乳類、鳥類、菌類、昆虫等、多様な生き物の暮らしを通じた森林の解説となっている。日本の森林生態系を構成する生き物たちの姿が、最新の研究成果を踏まえて描かれており、研究の最前線に触れることができる部分である。

第 3 部は「森林と人」がテーマであり、森からの恵み（森から人へ）、森が育む文化、森を活かす仕組みと社会（人から森へ）といった内容のトピックが続く。この部分はまさに「人と森林のよりよい関係を追及する森林科学」の研究者ならではの多様な視点でできている。日本の国土の 67% が森林である日本に暮らす我々が、森林とどのようなかかわりを持って暮らしてきたのか？そして、森林との関りが過去に比べて薄れてきているといわれる現代の私たちが、今後どのよう



な森林との関係性を築いてゆくのか？を再認識し、考えさせられる重要な部分である。

個人的な感想になるが、この第 3 部を読み進んでいく中で、1 枚の写真に目が釘付けになった。それは「森に関わる人々の営み」というタイトルで書かれた赤池慎吾氏の文中に掲載された写真である。ここでは高知県魚梁瀬で杣として働いていた方の半生を通じて、鋸からチェーンソーへの変遷が描かれているが、そこに「樹齢 520 年のツガの伐採」という写真が載せられている。こんな大きなツガを有する森林が高知にあったのか……。思わずつぶやいてしまったが、ツガの巨木を巨大な鋸で伐採している場面が写真に残されている。この写真を見るだけでも、本書を手にする価値はあると感じた。

本書の第 1 部では、現代日本の代表的な森林が描かれているが、これ以外に、失われた巨木の森がかつての日本には存在したのであろう。その片鱗を示す写真や資料がまだ日本のどこかに残っているかも分からない。残された断片的資料を駆使して、失われた本来の日本の森の再構築が進むことを期待しつつ本書の紹介を終わりにする。

山中典和（鳥取大学 名誉教授）

日本緑化工学会 第18期第5回理事会 議事録

日時：令和6年6月30日（日）12：30～16：30

場所：東京会場（東京都港区虎ノ門3丁目18-5 国土防災技術株式会社 会議室）、広島会場（広島県広島市佐伯区三宅2-1-1 広島工業大学 21号館3階306教室）及び、オンライン（Zoom）

出席者：高橋輝昌、岩崎 寛、築瀬知史、今西純一、入山義久、上野裕介、内田泰三、大貫真樹子、岡 浩平、小川泰浩、篠田 貴、田崎冬記、橘 隆一、田中 淳、辻 盛生、中村華子、早坂大亮、福井 亘、松本 浩、眞見和樹、三木直子、宗岡寿美、森川政人、森本淳子、山本 聡（以上理事）、吉崎真司、田中賢治（以上監事）

委任状提出：小野幸菜、梶川昭則、倉本 宣

第18期第5回理事会が令和6年6月30日（日）に開催され、以下の議題について審議された。

1. 令和5年度日本緑化工学会賞について

学会賞選考委員会（委員長：岩崎副会長）より、令和6年6月13日（木）に行われた学会賞選考委員会において、令和5年度日本緑化工学会賞の候補者3名が選定されたことが推薦理由とともに報告され、承認された。この結果、以下の受賞者が決定した。

授与式は、9月の令和6年定時総会にて行われる。

○研究奨励賞：松岡達也氏（清水建設株式会社）

受賞題目 屋上緑化におけるセダムの混植が蜜源植物の生育に及ぼす効果に関する一連の研究

○技術奨励賞：佐藤厚子氏（国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所）

受賞題目 メッシュシートを用いたオオイタドリの生育抑制手法の開発に関する一連の研究

○功績賞：小林達明氏（千葉大学名誉教授）

受賞題目 緑化分野における再生生態学の研究と普及に関する功績

2. 会則改定について

会則改定事項（前回理事会から検討中の内容を含む）が総務部会（部会長：内田理事）より示され、以下が承認された。今回の内容を反映させた改定案を、9月13日に開催される定時総会に上程する。尚、各条項の並び等詳細については、総務部会へ一任することとした。

- ・会則内の「学会誌」の表記：変更なし。
- ・第21条（総会の議決事項）：「解散及び合併」、「役員の選任及び解任」を追加。
- ・第34条7（幹事）：（幹事を）「置く」→「置くことができる」に変更。
- ・第38条(1)（編集部会）：「学会誌、その他刊行出版に関すること」→「学会誌の刊行に関すること」に変更。
- ・第39条(1)（学術国際交流部会）：当事項（「日本学術会議に関すること」）を総務部会の担当事項（第35条）に移動。
- ・第39条（学術国際交流部会）：「英文誌 LEE の刊行に関すること」を追加。

また、関連して、各部会に引き継がれる過去の事例や決め事を細則、内規などに明文化及び、会則に紐付けし参照できるようにする必要があるとの意見があがり、今後継続して検討する。

3. 学会誌第50巻1号からの発行体制

3-1 編集委員会の作業及び学会誌刊行に関する費用について

編集委員会（委員長：岡理事）より、新事業年度となる2024年8月からの学会誌発行体制に関し、編集員会で取り組まれた作業内容、流れの解説とともに、J-stage への原稿掲載に関する作業の外注2社（アトラス社及び、ジャーナルサポート社）との契約内容が示され、ジャーナルサポート社と新たな契約及び、2社との契約内

容、費用が承認された。

また、第 50 巻からの発行費予算が提案され、了承された。

3-2 学会誌の巻・号の編成について

学会誌第 50 巻以降の編成方針について、以下が提案され、引き続き検討する。

- ・第 50 巻（2024 年度刊行）は移行期間とし、従来通り 1～4 号を編成する。（1 号は大会号）
- ・第 51 巻（2025 年度刊行）以降は、「大会号」と「通常号」の 2 号編成とし、大会号以外は、採択が決まった原稿から J-stage へ即時公開する。

4. デジタル改革関連

4-1 コミュニティレターの発行

デジタル改革ワーキンググループ（以下、WG とする）コミュニティレター（以下、CL とする）担当 橋理事より、CL の作成状況が報告された。これまで試行版を作成しており、事業新年度の 2024 年 8 月に正式版（第 1 号）を発行の予定。以下が了承された。

- ・発行は年 3～4 回を予定し、橋理事がとりまとめる。作業担当は今後検討。
- ・CL は学会ホームページ（以下、HP とする）内のサイトに PDF ファイルにて公開する。デジタル改革 WG HP 担当 辻理事が外部発注にて CL の掲示先サイトを準備中で、様式は辻理事に一任する。
- ・企業広告を CL に掲載する。広告掲載の報告のため、賛助会員へは印刷した CL を郵送する。広告に関しては、辻理事とデジタル改革 WG 広告担当 田中淳理事が、広告サイズや費用等を打ち合わせ中。
- ・CL の印刷と郵送は、事務局委託先である(株)勝美印刷に依頼する。
- ・CL の発行、公開について、9 月の定時総会に諮る。総会で承認後、正式版を HP に公開する。

4-2 ホームページ整備の進捗

上記 1)に関連し、辻理事より作業中の HP 整備について進捗内容が説明された。①学会誌サイトへのバックナンバー追加は、順次作業が進んでいる、②新規作業となる CL サイトの構成を外注先（つるた氏）と検討中、③トップページの構成（年間広告のバナー位置等）を検討中。

また、以下について了承された。

- ・外注先からの見積りが提示され、金額の承認。内訳として、CL サイト制作、サイトへの CL ページ追加（1 件あたり）、追加済み CL への項目追加対応。
- ・今後は、CL 発行毎にサイトへのページ追加費がかかる。予算計上のため、年間発行回数を決める必要があり、引き続き橋理事、WG と検討し理事会に諮っていく。
- ・広告料金（バナー掲載）については、WG で引き続き検討する。

5. 学会の収入維持についての検討

5-1 今後の広告掲載について

田中淳理事より、新事業年度からの広告収入維持への対策に向けての検討事項、提案が示された。次の内容を引き続き検討することとなった。

- ・広告場所は、CL の本文内、CL サイトのバナー、HP トップページバナー（内容はすべて同じ）とする。また、大会サイト（または、大会用 HP）などへのスポット的なバナー広告の募集も検討する。
- ・賛助会員へは、CL 発行毎に印刷物を郵送する。
- ・これまでと一新した広告形態であり、新たな金額設定が必要。広告種類、サイズ別の設定を考慮しており、引き続き WG にて検討。
- ・広告主（賛助会員）に、新たな広告形態でのメリットを説明の必要。広告継続の依頼を、田中淳理

事、デジタル改革 WG 総括の築瀬副会長を主体に実施予定。

5-2 年会費の取り扱いについて

経理部会（部会長：築瀬副会長）より、年会費未納者への対策内容の報告とともに、未納金の解消と年会費納入確保のための提案がなされ、以下が了承された。

- ・2年以上の会費滞納者（会員資格喪失の対象）へは、新年度以降以降、引き続き経理部会から督促を行い、連絡先不明の未納者とともに退会処理等を行うこととする。
- ・今期理事の所属組織内に未納者がいる場合は、各理事が未納者本人に未納金納入を促すとともに、滞納金の回収可否、今後の入会継続の意思を確認し、結果と連絡先を経理部会へ伝える。
- ・今後のスムーズな会費納入と督促手間や郵便代の軽減のため、会員への自動振り込みの推奨をはかる。請求書、領収書の発行についても対応できることとする。
- ・学生会員の入会時連絡先登録が徹底されていないと宛先等不明になりがちであり、管理方法を点検してしっかり管理することとした。

6. 大会関連

6-1 2024 年大会

2024 年大会運営委員長 橘理事より、9 月に開催される 2024 年大会の準備進捗が報告され、了承された。現在の各種件数として、発表申し込み 14 件、研究集会 5 件、現地見学会申し込み 10 件。また、企業展示申し込みが 1 件あった。

今後の案内は HP にて随時発信する。

6-2 2025 年大会

2025 年大会運営委員長 今西理事より、2025 年大会について、現時点での予定内容、担当者が報告され、承認された。今後も引き続き各種調整を行っていく。

1)大会内容

- ・日程 2025 年 9 月 8 日（月）～10 日（水） 対面開催
- ・会場、行事予定
 - 1 日目（於 京都大学芝蘭会館）：シンポジウム、通常総会、評議員会
 - 2 日目（於 1 日目同及び、芝蘭会館別館）：口頭発表、ポスター発表、研究集会
 - 3 日目（於 EXPO2025 大阪・関西万博）：現地見学会 静けさの森・大屋根リングの大規模植栽の見学。見学会後に万博視察の予定。
- ・シンポジウムテーマ 「緑化の未来を拓く！森林・草地生態系における群落形成の科学」
緑化における目標群落の設定・管理、緑化における群落の取り扱い方の要点を講義。講師（交渉中）：神戸大 石井先生、東京農大 山田先生
- ・懇親会は 1 日目に開催の予定。（於 京都大学生協吉田食堂）
- ・資材・工法展示は初日と翌日の 2 日間。

2)運営委員と担当

大会運営委員長・シンポジウム企画運営：今西理事、現地見学会：福井理事、大学会場担当：京都大 貫名先生、研究交流発表会：京都大 深町先生

7. 令和 6 年能登半島地震に関する活動

高橋会長より、令和 6 年能登半島地震に関する取り組みとして、会員有志（会長以下 13 名）にて、震災以降、現地視察や衛星画像・地理情報解析、地元有識者へのヒアリングを実施してきたことが報告された。これらの活動内容については、森本理事を中心とした学会有志による「初期調査としての情報発信の第一弾」として取りまとめる予定であることが報告され、目次案が紹介された。

今後、新年度に、改めて当震災の復興支援のための組織（委員会等）の立ち上げを検討、また、会員への活動

の周知のために、9月の2024年大会において関連の研究集会を開催する案や、学会誌に特集を計画する等があった。

8. 役員交代

篠田理事より、所属先変更により、8月の新年度から篠田理事の所属後任である(株)高速道路総合技術研究所 今井氏への理事交代の提示があり、承認された。理事交代にあたっては、今後開催の定時総会に諮り、承認のうち、篠田理事の退任をもって今井氏が新たに理事に就任する。また、定時総会直前に開催予定の第18期第7回理事会には、今井氏にオブザーバーとして出席いただくこととなった。

9. 令和6年度定時総会の議案資料について

総務部会（大貫理事）より、令和6年度通常総会の議案資料の提出依頼があった。令和5年度の各部会・委員会の活動報告を、7月末を目途に総務部会にメールにて提出することとなった。経理部会については、令和5年度会計を集計し8月末に提出。

10. 学術国際交流関連

10-1 英文誌 LEE についての報告

学術国際交流部会（部会長：森本理事）より、英文誌 LEE のインパクトファクター（IF：他誌への引用多さの指標）が 2.0（5年間）であり良好な評価であることが報告された。

10-2 ICLEE 大会

10月に開催する国際大会 ICLEE2024 について、発表・参加申込の周知をニュースメール（以下、NM とする）にて行うとともに、ICLEE 設立 20 周年記念行事での当学会紹介のため、各研究部会での最近の取り組みを紹介するスライド（各部会 1 枚）の作成依頼があった。スライドの雛型を森本理事が作成し、各研究部会長がスライドを作成し、9月20日までに森本理事へ提出することとなった。

11. 各部会報告・連絡

11-1 学会誌の編集状況（編集部会）

編集部会 岡理事から、学会誌の進捗状況が報告され、承認された。

1) 原稿審査状況

審査中の論文 6 編、技術報告 1 編、また、論文 2 編の掲載が決定した。

2) 第 49 巻 4 号について

6 月下旬に学会誌の公開作業が終了した。今後、NM にて PDF 版を配布。

3) 第 50 巻 1 号（大会特集号）の編集状況

論文、技術報告の各部門において編集委員会を開催したことが報告された。また、投稿状況として以下が報告された。

- ・論文部門：申し込み 24 件、投稿 21 件
- ・技術報告部門：申し込み 36 件、投稿 32 件
- ・技術報告部門の原稿を大会号編集委員長（山瀬氏）、副委員長（田崎理事）の 2 名で分担し対応。

4) その他の報告

① Editorial Manager のトラブルについて

Word 作成の原稿を Editorial Manager（以下、EM とする）にアップロードし PDF に自動変換する際にレイアウトが崩れるという事象が発生した。現在は不具合の解消済み。

② 原稿募集

特集、コラム、その他原稿を随時募集中。理事方へ原稿募集の声かけがあった。

11-2 会員の入退会と管理（総務部会）

1)会員の異動

総務部会 内田理事から、令和6年2月1日～令和6年4月30日の会員の異動が報告され、承認された。

2)学生会員の特例制度について

学生会員に適用される特例制度の内容が周知されていなく、後付けで適用の申し込み及び、学会から返金が1件発生したことが報告された。このため、会員へあらためて特例制度の周知を行うことが了承された。

11-3 経理および収支状況（経理部会）

経理部会 入山理事（欠席の梶川理事に代わり報告）より、令和5年度予算書（令和5年8月1日～令和6年7月31日）の進捗状況とともに、令和6年4月30日までの収支に問題がないことが報告され、承認された。

11-4 2024年実施予定の企画行事（企画・事業部会）

企画・事業部会 中村理事から、2024年度に実施を予定する以下の行事が報告され、承認された。

1)緑化工セミナー「未来の緑化工セミナー」（担当：松本理事、倉本理事）

内容は、学会誌掲載のコラム「新博士紹介」の執筆者による話題提供とし、第1回を8月下旬に開催する。今後の予定は以下。また、セミナー時に使用した話題内容の資料をHPに掲載する。

- ・第1回（2024年8月下旬）宮本脩詩氏，高林 裕氏
- ・第2回（2024年10～12月）宮崎直美氏
- ・第3回（2025年1～3月）阿部健太氏，西野文貴氏
- ・第4回（2025年4月以降）小川泰浩氏

2)2024年大会シンポジウム、現地見学会の支援

大会運営委員会主催の行事である、シンポジウムと現地見学会について、企画・事業部会からも支援する。今後、両者で役割を調整していく。

3)現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生」の企画（担当：上野理事，中村理事）

令和6年能登半島地震の被災地を視察し、現地状況や森林・河川等の被害を実際に見て、感じて、自然再生の必要性を参加者が話し合うことを目的に企画する。現地視察とともに、現地に宿泊して意見交換・懇親会を開催する。開催時期は10月上旬とし、1.5日程度の日程を予定。ただし、現地受け入れがまだ不安定であり、参加人数や宿泊地、行程など、現地事情に配慮しながら今後検討を進める。

11-5 Zoom 配信連続講習会（生物多様性緑化研究部会）

生物多様性緑化研究部会 中村理事より、明治大学農学部 応用植物生態学研究室と共同開催中のZoom配信による連続講演会の今後の予定が報告された。現在決定している開催日、講義題目、講師は以下。今後も毎月1回開催し、2025年9月まで継続する。また、学会誌第50巻2号に、これまでの講義内容のまとめと、Zoom配信による当該活動の評価に関する記事を掲載予定。

- ・2024年7月3日 里山の土地利用変化と公園のあり方（仮）（倉本理事）
- ・同 8月28日 環境ポテンシャルから大規模公園を見る（仮）（鳥取大学農学部特任教授 日置佳之氏）
- ・同 9月25日 明治大学黒川農場の植生管理（箱根植木(株) 前田瑞貴氏）

11-6 阿蘇地域における活動の報告（生態・環境緑化研究部会）

生態・環境緑化研究部会 中村理事より、2023年度の阿蘇ワーキングチームによる阿蘇地域における活動について報告された。環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所・熊本県阿蘇振興局と、地元組合との地域性種苗による緑化工の実施、モニタリング調査等について報告された。また、「自然保護助成基金」（助成：2023年4月～2024年3月）へ報告書を提出し、内容が今後J-stageに公開予定であることも報告された。

新年度の計画としては、引き続きの現地での緑化活動と、2024年大会に研究集会を計画することが発表された。

12. その他

1)学会誌の形式形態について

辻理事より、これまで配布されてきた学会誌の冊子体形式を残すか明確にする必要があり、次回理事会での議論が提案された。

(以上)

日本緑化工学会 第18期第6回理事会 議事録

審議期間：令和6年7月26日（金）～8月5日（月）

場所：書面審議（メール）

出席者：高橋輝昌，岩崎 寛，築瀬知史，今西純一，入山義久，上野裕介，内田泰三，大貫真樹子，岡 浩平，小川泰浩，小野幸菜，梶川昭則，倉本 宣，篠田 貴，田崎冬記，橘 隆一，田中 淳，辻 盛生，中村華子，早坂大亮，福井 亘，松本 浩，眞見和樹，三木直子，宗岡寿美，森川政人，森本淳子，山本 聡（以上理事），吉崎真司，田中賢治（以上監事）

第18期第6回理事会（臨時）が，令和6年7月26日（金）～8月5日（月）に以下の内容について審議された。

1. 広告形態及び，掲載費の変更

日本緑化工学会誌第50巻（2024年8月より刊行）から学会誌を電子化することに伴い，デジタル改革ワーキンググループで検討した新たな広告の内容が示され，以下が承認された。

1) 広告の種類

広告の種類は，①学会のホームページ（以下，HP とする）のトップページのバナー広告，②学会記事やコラム等を発信するため新たに発行する「コミュニティレター（以下，CL とする）」（年3号を発行予定）と「日本緑化工学会大会研究交流会要旨集」への掲載，の2種を設定する。CLへ広告を掲載する場合は，HPのトップページのバナー広告（広告原稿はCLの広告に同じ）もセットとして設置できる。尚，契約期間中の広告原稿の変更は随時可能。

2) 広告の申し込み

広告掲載は，賛助会員の他，会員以外も申し込みができる。

3) 広告掲載料

掲載料は，「賛助会員」・「非会員」の別，「HP バナー単体」・「CL と HP バナーのセット」の別，広告サイズ（A4 サイズ全頁または，半頁）により，料金設定を変える。また，掲載料は1年間（学会の事業年度に同じく，8月1日～7月31日）の契約とし，支払い方法（一括または，4回分割）が選択できる。

2. 賛助会員への案内

賛助会員へ広告の継続掲載を依頼するため，CL 試行版を同封し，学会誌第50巻からの広告形態変更の説明並びに，広告募集の案内状を，8月上旬に学会長名で郵送することとなった。

（以上）

日本緑化工学会 第18期第7回理事会 議事録

日時：令和6年9月11日（水）17：30～20：00

場所：東京農業大学世田谷キャンパス 国際センター2階 カンファレンスルーム1（東京都世田谷区桜丘一丁目1-1）及び、オンライン（Zoom）

出席者：高橋輝昌，岩崎 寛，築瀬知史，今西純一，入山義久，上野裕介，内田泰三，大貫真樹子，岡 浩平，小野幸菜，梶川昭則，倉本 宣，田崎冬記，橘 隆一，田中 淳，辻 盛生，中村華子，福井 亘，松本 浩，眞見和樹，宗岡寿美，森川政人，森本淳子，山本 聡（以上理事），吉崎真司，田中賢治（以上監事）

委任状提出：小川泰浩，早坂大亮，三木直子

オブザーバー出席：今井祥之（篠田理事代理）

第18期第7回理事会が令和6年9月11日（水）に開催され，以下の議題について審議された。

1. 総会資料の確認

令和6年9月13日開催の令和6年通常総会（以下，R6総会とする）に配布する総会資料（案）について，事前に配布した議案本文の読み合わせをおこなった。併せて，各項の執筆を担当した理事へ最終確認，修正をもって総会資料が承認された。総務部会にて最終版の総会資料を作成し，実行委員会に印刷を依頼，当日配布する。

2. 経理報告

経理部会（部会長：築瀬副会長）より，令和6年8月29日に2023年度収支について吉崎・田中両監事の監査を受けたことが報告され，指摘事項が伝えられた。また，各事項について，築瀬副会長からの是正措置案が示され，引き続き検討していくことが了承された。（以下，各指摘事項→是正措置案，として並記する。）

- ・予算執行率が低い（52%）。学会活動の活性化のためにも適正な執行が望まれる。
 - 会長，岩崎副会長から，学会活性化のため研究・事業部会以外の活動も実施していくこと，また，予算執行について，各部会の活動経費の内訳を把握する必要がある，今後意見を聞いていきたいとの意見があった。
- ・未収金を負債計上する。
 - 2024年度決算より計上し，未収金への対策を意識する。また，会員数と会費徴収は関連するので，経理部会で両者を一元管理する提案，また，これに伴う事務負担の軽減のため，汎用性のある会員管理システムの導入を検討することも提案された。
- ・学生会員の会費未納が目立ち（5割以上），対策が必要。また，学生特例制度のルールが分かりづらく，運用に混乱がないよう対応すること。
 - 「学生特例制度」は，学生が大会発表のため入会（会員資格を得る）の場合に，大会申し込みの締め切りが学会年度前になるため本来必要となる前年度からの会費を免除する制度であり，監査でもよい制度であると認識されている。このため，特権の周知と，制度の簡便化を検討する提案があがった。今後，学会ホームページ（以下，HPとする）に掲載の制度についての説明文章を見直していくこととなった。文章案を岡理事・築瀬副会長が作成し，今後の理事会に諮る。
- ・学会誌掲載料（掲載決定後に支払う）の未納が多数生じている。掲載料を投稿料に含めるかたちで集金する等の検討が望まれる。
 - 編集部会および経理部会にて今後検討する。学会の負債である未収金を残さない対策として，両部会が連携して対応する。
- ・大会運営委員会の参加者管理と，会員資格の照合や投稿状況の把握に対し密な情報共有が望まれる。（総務・経理両部会，大会運営委員会との連携）
 - 大会運営委員会に，経理部会・大会編集委員会から各1名参画する等の案。

- ・研究部会等が学会として研究助成を受ける場合のルールづくりの検討を望む。
→現在、阿蘇プロジェクトが研究助成を受けており、これに続き、今後も他の研究部会・委員会が研究助成活動を行う際に学会からよりよいバックアップができるよう、体制構築・ルールづくりが必要との意見があがった。このため、出資元への提出物の提示や、助成金関連の入出金のための学会口座の開設等、今後検討する。
- ・事務局業務について、事務局と学会側の担当者との連携強化の継続を望む。
→業務の円滑な連携のために、事務局から理事会や大会等へ参画してもらう等の案。

3. 日本農学会への加盟

高橋会長より、当学会の研究活動の活性化および、学会の研究成果の対外的な評価を高めることを目的として、日本農学会への加盟が提案された。今後、R6 総会にて当件を会員に諮ることが承認された。

尚、R6 総会で承認後は、本年 11 月に加盟申請の手続きを行い、令和 7 年 2 月に開催の 2025 年日本農学会総会にて承認されたのち、正式に加盟となる。また、加盟後は、当学会より 1 名の運営委員を選出し運営委員会へ出席する。このため、専任担当の選出が必要であり、次回理事会にて引き続き話し合うこととなった。

〔備考〕日本農学会（事務局：東京都文京区 東京大学農学部内）は、昭和 4 年（1929）に農学関連学協会の集合体として設立され、今年で 95 年の歴史をもつ学会。平成 29 年（2017）に、一般社団法人として登記、現在、国内 54 の学協会が加盟している。また、農学振興に関する調査研究および各種提言の発信や、優れた農学研究に対し「日本農学賞」の授与並びに「読売農学賞」（読売新聞社から授与）への推薦を行うなど、農学の発展と普及を使命として活動している。

4. 役員交代

篠田 貴氏の理事退任に伴い、R6 総会の承認をもって今井祥之氏が理事に就任することが報告された。今井氏より挨拶があった。

5. 各部会報告・連絡

5-1 会員の入退会と管理（総務部会）

1) 会員の異動

総務部会 内田理事から、令和 6 年 5 月 1 日～令和 6 年 8 月 31 日の会員の異動が報告され、承認された。正会員、学生会員の異動の顕著な時期であり、入退会とも多かった。尚、学生会員から正会員へ種別変更し、会員を継続する者が 2 名あった。また、学生入会者のうち、学生特例制度を申請していない者について、制度利用の要・不要を確認して入会処理を行うことも報告された。

2) 学生会員の特例制度について

学生会員に適用される学生特例制度について、会員へあらためて特例制度の周知を行うことが必要と認識された。

6. その他

6-1 研究交流発表会要旨集について

中村理事より、第 55 回大会にて行われる研究交流発表会の要旨集（HP に掲載中）および大会特集号（日本緑化工学会誌 第 50 巻 1 号）の会員へのパスワード周知を、日本緑化工学会ニュースメール 20240911 版にて配信することが報告された。

（以上）

第18期第1回評議員会 記録

日時：令和6年9月14日（土）11：30～13：00

場所：東京農業大学（1号館 232教室）

第18期第1回評議員会が、令和6年9月14日（土）に東京農業大学（1号館 232教室）において開催された。正副会長から事前に特にご意見を頂きたい項目として示されていた以下3点を中心に、意見交換をおこなった。

- ・学会誌の電子化・デジタル化後の学会運営について
- ・災害等の緊急の調査隊派遣などの対応について
- ・学会役員の選出・会員増加に向けた取り組みについて

1. 学会誌の電子化・デジタル化後の学会運営について

・2024年度予算案に、会員管理システム経費として150万円が計上されている。また、旅費交通費として昨年度を上回る経費が計上されている。デジタル改革で支出は削減できる見込みとのことだが、運営に問題はないか。

→（築瀬経理部会長）今期はこれまで未回収だった会費の徴収に着手しており、各項目の予算額も余裕を持たせているため問題ないと考える。学生特例は複雑であり手戻りが多いため、会員管理システムに移行したい。現在は会員情報にアクセスする手段が複雑なため、今後は権限を持つ会員が情報をスムーズに調べられるシステムを導入したい。理事会はコロナの影響がありオンライン開催だったが、顔を合わせて会議したほうが議論がスムーズに進むため、対面での会議に戻したい。

・学会誌のデジタル化により、予算と労力はどの程度削減できる見込みか。

→（岡編集部会長）学会誌の刊行費はこれまでの約1/2程度に削減できる見込み。労力については、エディトリアルマネージャーに移行する過渡期で試行錯誤しており、削減できていない。今後はマニュアルを作成するなど、労力を減らしていきたい。

→（岩崎副会長）コミュニティレターは、担当理事の負担増となっている。会員と一緒に作成していくコンセプトであり、評議員に協力をお願いしたい。コミュニティレターは、魅力的な内容にする必要があるので、ご意見をいただきたい。

・メーリングリストで大会号技術報告での問題点を共有してもらえたのは良かった。学会でどのようなことが起きているのか、情報共有の機会を増やしてはどうか。

→（内田総務部会長）今後は、評議員に理事会の議事録をメーリングリストで送付し、情報提供する。

2. 災害等の緊急の調査隊派遣などの対応について

・理事会での審議・承認が得られるようにWebでの審議や学会での報告を義務付けるなど、学会として迅速に決定し動ける体制を作った方がよいのではないかと。

・緊急対応専門の研究部会を作り、予算を確保してはどうか。急に部会を作ることが難しいのであれば、研究部会長が兼務する形で緊急対応組織としてはどうか。

→（高橋会長）災害対応特別費は昨年度より増額している。参考にしたい。

・能登半島地震の調査について、緑化工学会として迅速に動く必要性はあったのか。

・災害発生後に緊急性を要するのはライフラインなどの復旧なので、植物を取り扱う緑化工学会ならではの、長く被災地に寄り添う支援ができると良いと考える。

→（築瀬経理部会長）能登半島地震の現地調査について、成果品が見えていない状況では予算は出せないと判断した。理事会の中でも様々な意見がある状況。

→（高橋会長）現場で活用できる工法や地域性種苗など，復興支援の方向性を決めるために，迅速な調査が必要だったと理解している。流木は時間がたつと撤去されてしまい，状況が把握できない。熊本地震，東日本大震災など災害が多発しているので，何らかの対応ができるように検討したい。

→（岩崎副会長）今後，メンタルケアや町づくりなど長期的な支援が必要になる。研究部会か何らかの組織を作り，継続して対応することを検討したい。

3. 学会役員の選出・会員増加に向けた取り組みについて

・（高橋会長）監事から予算の執行率が低いとの指摘を受けている。理事が研究部会の活動に労力を割けない状況であることから，より多くの人がかかわることで負担が分散できると考える。

・未来の緑化工セミナーは自身の研究成果を広める貴重な機会となった。CPD ポイントが付与されるので，他のイベントでも付けていくとよいのではないかな。

→（内田総務部会長）今後はなるべく多くの研究集会や勉強会で CPD 申請していく。

・緑化工学に分野の大学や企業との関係を維持するとともに，2 人目を紹介してくれたら特典を付けるなど，他分野からも緑化工学会に入会してもらえよう PR してはどうか。

・学会参加は学生の就職活動において自己 PR にもなる。

・学生会員を増やすことは直接の収入増加にはつながらないかもしれないが，学会活動は学生にとって企業の担当者と直接接点できる機会となる。就職活動の一環としてもっと活用してもらおうと良いのではないかな。

→（高橋会長）参考としたい。

高橋会長より評議員方々へのあいさつがあったのち，閉会した。

（以上）

令和6年通常総会の開催

令和6年通常総会が、令和6(2024)年9月13日(金)に開催された。高橋輝昌会長から開会の挨拶があり、その後、高橋会長が議長に選出され、議案審議が行われた。なお、開催日現在の会員数551名に対し、会場出席者90名、委任状が37通の計127名が出席し、定足数(正会員の1/5以上:111名)を超え総会が成立した。

令和6年通常総会 議事録

日時: 令和6(2024)年9月13日(金) 14:00~15:00

場所: 東京農業大学 横井講堂(東京都世田谷区桜丘1-1-1)

1. 第一号議案: 令和5(2023)年度事業報告

内田泰三総務部会長より、標記について資料(別表1)に基づき報告が行われ、異議なく承認された。

2. 第二号議案: 令和5(2023)年度決算報告

築瀬知史経理部会長より、標記について資料(別表2, 3, 4, 5)に基づき報告が行われ、異議なく承認された。また、吉崎真司監事および田中賢治監事より、経理処理は適正に行われたとの監査結果が報告された(別表4)。

3. 第三号議案: 会則の改定案

内田総務部会長より、標記について資料(別表6)に基づき説明があり、異議なく承認された。

4. 第四号議案: 令和6(2024)年度事業計画案

内田総務部会長より、標記について資料(別表7)に基づき説明があり、異議なく承認された。

5. 第五号議案: 令和6(2024)年度収支予算案

築瀬経理部会長より、標記について資料(別表8, 9)に基づき説明があり、異議なく承認された。

6. 第六号議案: 役員の一部改選

内田総務部会長より、役員の一部改選について資料(別表10)に基づき説明があり、異議なく承認された。被選者は就任を承諾した。

以上で議事が終了し、閉会した。

なお、総会の開催前に、令和5年度日本緑化工学会賞の授与式が行われた。岩崎 寛学会賞選考委員長による選考経過の報告に引き続き、高橋会長から研究奨励賞が松岡達也氏に、技術奨励賞が佐藤厚子氏に、功績賞が小林達明氏に贈られた。

資料

(別表1) 日本緑化工学会 令和5(2023)年度事業報告

(別表2) 日本緑化工学会 令和5(2023)年度収支報告書

(別表3) 日本緑化工学会 令和5(2023)年度基金収支報告書

(別表4) 日本緑化工学会 令和5(2023)年度貸借対照表及び財産目録、会計監査報告

(別表5) 日本緑化工学会 令和5(2023)年度阿蘇プロジェクト活動 収支報告書

(別表6) 会則の改定新旧対照表

(別表7) 日本緑化工学会 令和6(2024)年度事業計画案

(別表8) 日本緑化工学会 令和6(2024)年度予算案

(別表9) 日本緑化工学会 令和6(2024)基金予算案

(別表10) 役員の一部改選

(以上)

令和 6年 9月13日 (金)

日 本 緑 化 工 学 会

令 和 6 年 通 常 総 会

於：東京農業大学 横井講堂
東京都世田谷区桜丘1-1-1

－ 次 第 －

議 案

- (1) 第一号議案 令和5年度事業報告
- (2) 第二号議案 令和5年度決算報告
- (3) 第三号議案 会則の改定
- (4) 第四号議案 令和6年度事業計画
- (5) 第五号議案 令和6年度収支予算
- (6) 第六号議案 役員の一部改選
- (7) その他

日本緑化工学会 <http://www.jsrt.jp/>

(大会会期中・会議関係日程) 2024年 於：東京農業大学

9月13日 (金) 14:00～15:00 学会賞表彰式 及び 定時総会 (横井講堂)

9月14日 (土) 11:30～13:00 評議員会 (会場A: 1号館 232教室)

第一号議案

日本緑化工学会 令和5年度事業報告

(令和5年／2023年8月1日～令和6年／2024年7月31日)

1. 第54回日本緑化工学会大会の開催

開催年月日：2023年9月20日（水）～22日（金）

開催地：新潟コンベンションセンター 朱鷺メッセ（新潟県新潟市）及び 周辺

発表題数：64題（口頭発表 16件、ポスター発表 48件）

発表件数のうち 論文 13件、技術報告 23件、研究交流発表 28件

参加者：226名（会員 157名、学生 20名、一般 49名）

公開シンポジウム「新潟の海岸から学ぶグリーンインフラ」（9月21日）を開催。

現地見学会「新潟の海岸で感じるグリーンインフラ」（9月22日）を実施。

研究集会6件を会期中に開催。

2. シンポジウム

(1) 第54回日本緑化工学会大会にて公開シンポジウムを開催

開催年月日：2023年9月21日（木） 14:30～16:45

会場：新潟コンベンションセンター 朱鷺メッセ 3F 302（中会議室）

テーマ：「新潟の海岸から学ぶグリーンインフラ」

参加者：202名

3. 現地見学会

(1) 第54回日本緑化工学会大会にて現地見学会を実施

開催年月日：2023年9月22日（金） 9:00～15:00

見学地：新潟県柏崎市松波、新潟市青山海岸を視察

テーマ：「新潟の海岸で感じるグリーンインフラ」

参加者：44名

4. 緑化工セミナー

学会諸活動をPRすること、学生や若手に活動内容を積極的に伝え、当学会の魅力を伝えることを目的とした「緑化工セミナー」を企画した。（昨年度中は開催なし）

5. 研究会等

(1) 生物多様性緑化研究部会

「未来の里山における人と自然を考える連続講演会」を、共催にて毎月1回オンライン開催。

主催：明治大学農学部応用植物生態学研究室 後援：一般財団法人世田谷トラストまちづくり

周知方法：運営メーリングリスト登録者へ案内を送付。

参加人数：各回30～50名

第5回：2023年8月2日（水） 秋山幸也 「ナラ枯れで更新される雑木林／生物学的現象」

第6回：2023年9月26日（火） 田口洋美

「山村の生物多様性を基盤とした狩猟採集活動から里山の未来を考える」

第7回：2023年10月4日（水） 小島 渉 「カブトムシとナラ枯れ」

- 第8回：2023年11月21日（火） 中沢一将 「管理の一元的な記録」
- 第9回：2023年12月6日（水） 壹崎昌和 「発生材活用の発想」
- 第10回：2024年1月10日（水） 島田和則
「都市近郊域における雑木林の生物多様性保全のための管理と課題」
- 第11回：2024年3月5日（火） 久保田繁男
「放置林の皆伐と萌芽更新＋天然下種更新による森林再生」
- 第12回：2024年3月13日（水） 荻野 豊 「小面積で多数のトラスト地の管理の試行錯誤」
- 第13回：2024年4月24日（水） 中村華子
「多様な主体との協力・連携によりすすめる阿蘇の草原植物の活用と地域活性化」
- 第14回：2024年5月15日（水） 山田 晋 「ヨーロッパの草原とその管理」
- 第15回：2024年6月12日（水） 深澤陽子
「房総半島に自生するミツバツツジ類の保全から考えるまちづくり」
- 第16回：2024年7月3日（水） 倉本 宣 「里山公園における林畑転換の意義」

（2）生態・環境緑化研究部会

阿蘇の現地プロジェクトの継続及び関連活動（阿蘇ワーキングチーム）

- ・波野地区 すずらん自生地管理組合と共催の写真展 2024年4月～5月開催
- ・環境省直轄登山道における地域性種苗播種工の実施、モニタリングの継続
- ・熊本県阿蘇振興局発注工事における地域性種苗利用工の実施支援、モニタリングの継続
- ・阿蘇草原再生協議会への参加
- ・現地活動助成金：公益財団法人自然保護助成基金 協力型助成（2023年4月～2024年3月）

2022年度報告「阿蘇の草原植物の活用と地域活性化を目指した地域性種苗による緑化普及の取り組み」（自然保護助成基金助成成果報告書 vol. 32（2023）236-250p）をまとめた。

（3）斜面緑化研究部会 第54回大会にて研究集会を開催

開催日時：2023年9月20日（水） 14：30～16：00

会 場：新潟コンベンションセンター 朱鷺メッセ 201A

テーマ：「高強度の降雨に対応する斜面緑化を考える（Ⅱ）」（研究集会4）

参加者：約85名

（4）緑化植物委員会 第54回大会にて研究集会を開催

開催日時：2023年9月20日（水） 16：15～17：45

会 場：新潟コンベンションセンター 朱鷺メッセ 201A

テーマ：解説 「生物多様性に配慮した緑化植物の取り扱い方に関するガイドライン 2023」
（研究集会5）

参加者：約90名

（5）海岸林・沿岸域緑化研究部会 第6回公開勉強会（オンライン）の開催

開催日時：2023年12月4日（水） 17：30～19：00

開催方法：オンライン（Zoom）

テーマ：「海岸の連続性を考えるⅢ クロマツ林の管理と配置」

参加者：70名

(6) 緑・健康研究部会 オンラインセミナーを開催

開催日時：2024 年 7 月 30 日（火） 18：30～19：30

開催方法：オンライン（Zoom）

テーマ：「勤務者の健康とオフィス緑化ーバイオフィリックオフィスデザイン」

参加者：25 名

(7) 第 54 回大会 企画研究集会

① 企画担当：今西亜友美（研究集会 1）

開催日時：2023 年 9 月 20 日（水） 9：30～11：00 会場：201A

テーマ：OECM で生きる！生物のすみかとしての文化的緑地

② 企画担当：平林 聡・加藤 颯（研究集会 2）

開催日時：2023 年 9 月 20 日（水） 9：30～11：00 会場：201B

テーマ：i-Tree による生態系サービス評価ー実務での活用事例と日本発の新規機能実装への展望

③ 企画担当：小林達明・森本淳子・岡 浩平（研究集会 3）

開催日時：2023 年 9 月 20 日（水） 14：30～16：00 会場：201A

テーマ：ランドスケープの生態的レジリエンスを考える

④ 企画担当：手代木純・日下部友昭（研究集会 6）

開催日時：2023 年 9 月 20 日（水） 16：15～17：45 会場：201B

テーマ：グリーンインフラ技術開発のための実証調査の紹介

6. 学会誌の発行

(1) 第 49 巻 1 号（デジタル版＋冊子版）：令和 5 年 8 月 31 日発行 171 ページ（第 54 回大会特集号）

(2) 第 49 巻 2 号（デジタル版＋冊子版）：令和 5 年 11 月 30 日発行 92 ページ

(3) 第 49 巻 3 号（デジタル版＋冊子版）：令和 6 年 2 月 29 日発行 76 ページ

(4) 第 49 巻 4 号（デジタル版＋冊子版）：令和 6 年 5 月 31 日発行 70 ページ

- ・第 49 巻 2 号に、特集「乾燥地林の保全と再生を考える」及び「グリーンインフラ技術開発のための実証調査の紹介」を掲載。
- ・第 49 巻 3 号に、特集「OECM で生きる！生物のすみかとしての文化的緑地」及び「ランドスケープの生態的レジリエンスを考える」を掲載。
- ・第 48 巻 4 号に、特集「i-Tree による生態系サービス評価ー実務での活用事例と日本発の新規機能実装への展望ー」を掲載。
- ・第 49 巻 4 号をもって冊子版の発行を終了し、第 50 巻からデジタル版のみの発行に移行する。

7. 英文誌 Landscape and Ecological Engineering (LEE) の発行

(1) Vol. 19 No. 4：2023 年 10 月発行（11 編）

(2) Vol. 20 No. 1：2024 年 1 月発行（8 編）

(3) Vol. 20 No. 2：2024 年 4 月発行（9 編）

(4) Vol. 20 No. 3：2024 年 7 月発行（20 編）

- ・2023 年 1 月から、個人会員は LEE 誌の論文等に無料でオンラインアクセス可能。（毎年 3 月頃にアクセス方法について学会員に案内）

<https://link.springer.com/journal/11355/volumes-and-issues>

- ・Journal Impact Factor：1.7 (2023), 5-year Journal Impact Factor：2.0 (2023)

8. 令和5年度日本緑化工学会賞の授与

研究奨励賞：松岡 達也

「屋上緑化におけるセダムの混植が蜜源植物の生育に及ぼす効果に関する一連の研究」

技術奨励賞：佐藤 厚子

「メッシュシートを用いたオオイタダリの生育抑制手法の開発に関する一連の研究」

功 績 賞：小林 達明

「緑化分野における再生生態学の研究と普及に関する功績」

9. CPD

- (1) 第54回日本緑化工学会大会：森林分野 CPD として、2名に述べ8ポイントを付与した。建設分野 CPD としては合計47ポイントを付与した。
- (2) 公開勉強会「海岸の連続性を考えるⅢ」：森林分野 CPD として、20名にポイントを付与した。

10. 学会誌の電子化に伴う学会活動・運営（デジタル改革ワーキンググループ）

- (1) コミュニティレターの発行

2024年1月に試行版を作成し、賛助会員に見本誌として配布した。

- (2) ホームページ整備の推進

- ・学会誌サイトの全体構成を外注してリニューアル、発行誌及びバックナンバーの掲載作業は学会員が担当できる体制を構築した。
- ・新規事業となるコミュニティレターサイトの新規作成について検討。
- ・学会誌で取り扱っていた学会記事、学会内外への情報公開、情報共有、広告などをホームページでの取り扱いに移行するため、担当理事やワーキングメンバーによる検討を進めた。

11. 情報共有委員会の新設

メーリングリスト green-if の運営について、総務部会が学会サーバーへメールアドレスを搭載、管理をおこなってきた体制を、google グループによる運用・情報共有委員会（新設）による管理運営の体制へ移行した。今後、SNS の連携などについては、委員会で検討・担当する。

12. 研究部門におけるその他活動

- (1) 防災学術連携体における活動

- ① 第18回防災学術連携シンポジウム（2024年3月25日開催）において話題提供
木田幸男会員（一般社団法人グリーンインフラ総研）
- ② 防災学術連携体2024年度総会に参加 小川委員（2024年7月30日開催）
- ③ その他 防災学術連携体の各種集会・行事等の告知、情報提供などに対応した。

13. その他事業

- (1) 日本学術会議に関する協力団体としての対応 基本情報の登録、資料提供、情報交換
- (2) ホームページ及び会員ブログの運営
- (3) 会員向け連絡「ニュースメール」の配信、情報管理と公開
- (4) 他団体行事への後援・共催等
 - ・日本緑化工協会 第44回緑化工技術講習会の後援
開催日：令和6年7月22日（月）～7月23日（火） 会場：東京農業大学

14. 会員数（令和6年7月末現在。括弧内は、←前年度末、←前々年度末、←前々々年度末の数。）

(1) 名誉会員：7名（←8名 ←9名 ←8名）

(2) 正会員：583名（←582名 ←560名 ←569名）

(3) 学生会員：84名（←79名 ←65名 ←80名）

(4) 賛助会員：53団体（←53団体 ←53団体 ←51団体）

(5) 購読会員：32団体（←32団体 ←33団体 ←35団体）

・大会発表のために入会する学生会員に対する会費優遇措置を2015年度より実施、継続。

2023年度 収支報告書

(2023年 8月 1日 ～ 2024年 7月31日)

日本緑化工学会

	費 目	予算額 (A)	決算額 (B)	差額 (B-A)	対予算割合 (B ÷ A × 100)	摘 要
収入の部	正会員費	4,080,000	4,420,400	340,400	108.34	正 会 員 583名 / 今年度入金 553名 (@8,000)
	賛助会員費	1,855,000	1,855,000	0	100.00	賛助会員 53団体 / 今年度入金 53団体 (@35,000)
	購読会員費	280,000	272,000	-8,000	97.14	購読会員 35団体 / 今年度入金 33団体 (@8,000)
	学生会員費	220,000	182,000	-38,000	82.73	学生会員 70名 / 今年度入金 46名 (@4,000)
	入会登録料	24,500	32,900	8,400	134.29	47名 (@700)
	英文誌購読料	20,000	26,520	6,520	132.60	
	投 稿 料	340,000	480,000	140,000	141.18	Vol.49-1 ～ Vol.49-4 分
	広 告 料	1,000,000	1,300,000	300,000	130.00	Vol.49-1 ～ Vol.49-4 分
	雑 収 入	750,000	809,468	59,468	107.93	大会事務局経費、別刷・BN販売収入、著作権使用料、J-Stage有料閲覧費、利息等
	小 計	8,569,500	9,378,288	808,788	109.44	
	繰 越 金	5,722,558	5,722,558			
	合 計	14,292,058	15,100,846	808,788	105.66	
支出の部	会 議 費	50,000	0	-50,000	0.00	
	旅費交通費	100,000	50,460	-49,540	50.46	理事会交通費、対面開催は1回とし、他はWeb会議・メール会議とする
	事務人件費	505,000	465,380	-39,620	92.15	口座振替システム基本料金、HP・ML管理費、サーバーレンタル料
	通 信 費	350,000	365,064	15,064	104.30	会費請求書発送費、電話・FAX料、Zoomライセンス(2契約)
	事務用品費	100,000	79,662	-20,338	79.66	学会賞賞状・副賞、総務部会事務用品費
	学会誌刊行費	5,000,000	4,308,315	-691,685	86.17	投稿査読等システム・J-stage掲載料、冊子体印刷製本発送、投稿手数料補助費
	英文誌出版分担金	165,000	163,200	-1,800	98.91	英文誌出版分担金
	大会補助費	400,000	0	-400,000	0.00	大会開催補助費
	研究部会補助費	700,000	0	-700,000	0.00	研究部会活動費補助
	委員会等経費	400,000	0	-400,000	0.00	会議室使用料・旅費、編集委員会(通常号)・編集委員会(大会号論文部門・技術報告部門)・緑化植物委員会
	事務委託費	1,860,000	1,850,308	-9,692	99.48	学会事務業務委託費(会員入退会、会費徴収、会計事務業務等)
	諸会費	160,000	160,000	0	100.00	JABEE、JAFEE、防災学術連携体
	災害特別対策費	25,000	0	-25,000	0.00	災害調査費用 他
	雑費	30,000	6,300	-23,700	21.00	振込手数料 他
	記念事業費	0	0	0	0.00	
	基金積み立て	0	0	0	0.00	
	小 計	9,845,000	7,448,689			
	予備費	4,447,058	0	-4,447,058	0.00	
	合 計	14,292,058	7,448,689	-6,843,369	52.12	

次期繰越金		7,652,157
-------	--	-----------

2023年度 日本緑化工学会の収支決算内容を上記のとおりご報告申し上げます。

2024年8月29日

日本緑化工学会副会長兼経理部会長

築瀬 知史



2023年度 基金 収支報告書

(2023年 8月 1日 ~ 2024年 7月31日)

日本緑化工学会

	費 目	予算額 (A)	決算額 (B)	差額 (B-A)	対予算割合 (B÷A × 100)	摘 要
収 入 の 部	前期より繰り越し	1,130,019	1,130,019	0	-	
	利子収入	0	10	10	-	
	一般会計より戻し入れ	0	0	0	-	新規積み立て
	合 計	1,130,019	1,130,029	10	100.00	
支 出 の 部	一般会計へ繰り入れ	0	0	0	-	
	一般会計へ貸し出し	0	0	0	-	
	合 計	0	0	10	-	

次期繰越金		1,130,029
-------	--	-----------

2023 年度 貸借対照表及び財産目録

2024 年 7 月 31 日現在

資 産 の 部			負 債 の 部		
科 目	摘 要	金 額	科 目	摘 要	金 額
現 金	事務局	28,629	未払費用		3,949,815
預 金		15,550,322		事務人件費	120,000
	みずほ銀行 本郷支店	3,938,715		学会誌刊行費	3,829,815
	本郷郵便局	10,481,578	合 計		3,949,815
	三井住友銀行	1,130,029	純 資 産 の 部		
未 収 金		818,850	科 目	摘 要	金 額
	BN販売	6,350	前受会費		3,665,800
	別刷り代	17,500		正会員	1,960,800
	投稿料	70,000		賛助会員	1,575,000
	会費	227,000		学生会員	125,600
	購読料	8,000		LEE冊子	4,400
	広告費	490,000	次期繰越金		7,652,157
			基金繰越金		1,130,029
			合 計		12,447,986
合 計		16,397,801	負債・純資産計		16,397,801

－ 会計監査報告 －

2023年度(2023年 8月 1日 ～ 2024年 7月31日) 収支決算報告書および財産目録に基づき、帳簿類を監査したところ、適正であることを認めます。

2024/8/29

2023年度 日本緑化工学会

監事

吉崎 真司

同上

監事

田中 賢治

2023年度 阿蘇プロジェクト活動 収支報告書

(2023 年 7 月 1 日～2024 年 6 月 30 日)

日本緑化工学会 生態・環境緑化研究部会

	費 目	決算額	摘 要
収入の部	公財自然保護助成基金	900,000	公益財団法人自然保護基金より入金
	作業経費	359,700	タロックス株式会社
	小 計	1,259,700	
	繰 越 金	0	
	合 計	1,259,700	
支出の部	消耗品	86,593	針金・杭・手土産ほか
	委託費	55,220	有限会社ウェルディングギャング
	謝金	192,000	学生ボランティア日当・旅費交通費
	旅費交通費	575,552	航空券・レンタカー・宿泊料ほか
	通信運搬費	67,088	駐車料金・宅配便ほか
	図書資料費	32,750	印刷代・資料作成代金
	会議費	26,789	弁当代
	借用費	215,740	なみの高原やすらぎ交流館
	雑経費	6,823	行事保険
	小 計	1,258,555	
	学会本部繰り入れ費用	1,145	
	合 計	1,259,700	

次期繰越金	0
-------	---

2023年度 阿蘇小規模崩壊地復元プロジェクトの収支決算内容を上記のとおりご報告申し上げます。

2024年6月30日

上記内容に相違が無いことを確認しました。

2024 年 8 月 21 日

日本緑化工学会 経理部会

入山 義久



会則の改定（案）

会則の一部改定新旧対照表（下線は変更部分を示す。）

現 行	改 正	摘 要
第 4 条 本会は本部を東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科治山・緑化学工研究室内に置く。	第 4 条 本会は本部を東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科 <u>治山緑化工学</u> 研究室内に置く。	名称の変更
第 6 条 本会の会員は次のとおりとする。 （1）正会員 本会の目的に賛同する個人 （2）賛助会員 本会の事業を賛助する団体 （3）購読会員 会誌の購読のみを目的とする団体、または個人 （4）学生会員 大学（大学院、短大を含む）、高等専 門学校に在籍している個人 （5）名誉会員 緑化に関し、または本会に特に功績 のあった者で、総会の議決をもって推挙された者	第 6 条 本会の会員は次のとおりとする。 （1）正会員 本会の目的に賛同する個人 （2）賛助会員 本会の事業を賛助する団体 <u>（3）</u> 学生会員 大学（大学院、短大を含む）、高等専 門学校に在籍している個人 <u>（4）</u> 名誉会員 緑化に関し、または本会に特に功績 のあった者で、総会の議決をもって推挙された者	講読会員の廃止に伴い現行（3）を削除し、号番号を繰り上げ
第 7 条 本会の会費は次のとおりとする。 （1）正会員 年額 8,000 円 （2）賛助会員 年額 35,000 円以上 （3）購読会員 年額 8,000 円 （4）学生会員 年額 4,000 円 （5）名誉会員 会費を納めることを要しない	第 7 条 本会の会費は次のとおりとする。 （1）正会員 年額 8,000 円 （2）賛助会員 年額 35,000 円以上 <u>（3）</u> 学生会員 年額 4,000 円 <u>（4）</u> 名誉会員 会費を納めることを要しない	講読会員の廃止に伴い現行（3）を削除し、号番号を繰り上げ
第 8 条 本会の会員になろうとする個人または団体は、入会申込書を会長に提出し理事会の承認を受けなければならない。 2. 入会者は所定の入会手数料および入会年度の年会費を納入しなければならない。	第 8 条 本会の会員になろうとする個人または団体は、入会申込書を会長に提出し理事会の承認を受けなければならない。 2. 入会者は所定の入会手数料 <u>及び</u> 入会年度の年会費を納入しなければならない。	文言の統一

現 行	改 正	摘 要
第 37 条 企画・事業部会の担当事項は次のとおりとする。 (1) ～ (3) (略) (4) その他要な事	第 37 条 企画・事業部会の担当事項は次のとおりとする。 (1) ～ (3) (略) (4) その他<u>必要</u>な事	誤植の修正
(事業部門：編集部会) 第 38 条 編集部会の担当事項は次のとおりとする。 (1) 学会誌、その他刊行出版物に関する こと (2) その他必要な事項	(事業部門：編集部会) 第 38 条 編集部会の担当事項は次のとおりとする。 (1) <u>学会誌の刊行</u>に関すること (2) その他必要な事項	実態に即するため
第 39 条 学術国際交流部会の担当事項は次のとおりとする。 (1) 日本学術会議に関すること (2) 国際学術交流に関すること (3) その他必要な事項	第 39 条 学術国際交流部会の担当事項は次のとおりとする。 (1) <u>英文誌 LEE の刊行</u>に関すること (2) 国際学術交流に関すること (3) その他必要な事項	実態に即するため

第四号議案

日本緑化工学会 令和6年度事業計画（案）

（令和6年／2024年8月1日～令和7年／2025年7月31日）

1. 第55回日本緑化工学会大会の開催

開催年月日：2024年9月12日（木）～14日（土）

開催地：東京農業大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区）および周辺

発表題数：82題（口頭発表 17件、ポスター発表 65件）

発表件数のうち、論文 9件、技術報告 16件、研究交流発表 44件

現地見学会「nature positive 織りなす都市・Tokyo」（9月12日）を開催予定。

公開シンポジウム「ヒトが生み出し・つなぐ Tokyo のみどり」（9月13日）を実施予定。

※ 第56回大会は、2025年9月8日（月）～10日（水）に、京都大学にて開催予定。

現地見学会は EXPO2025 大阪・関西万博会場を予定。

2. 研究会等

(1) 生物多様性緑化研究部会

「未来の里山における人と自然を考える オンライン連続講演会」を共催にて毎月1回開催。

主催：明治大学農学部応用植物生態学研究室 後援：一般財団法人世田谷トラストまちづくり

第17回：2024年8月28日（水）日置佳之「生田緑地と環境ポテンシャル」

第18回：2024年9月25日（水）前田瑞貴「明治大学黒川農場の植生管理」

その後も月1回程度開催予定。

(2) 斜面緑化研究部会

第55回大会において研究集会を企画

開催日時：2024年9月14日（土） 13:15～14:45 会場：B（242）

テーマ：「外来草本ヨシススキの分布域拡大状況の確認と課題」（研究集会4）

(3) 生態・環境緑化研究部会

①阿蘇の現地活動の継続（阿蘇ワーキングチーム）

②環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所等と連携した地域性種苗利活用促進、情報発信活動を継続
（環境省直轄登山道における施工箇所のモニタリング、維持管理の継続等）

③在来緑化植物の地域性の検討、阿蘇ガイドラインの作成と公開

④第55回大会において研究集会を企画

開催日時：2024年9月14日（土） 15:00～16:30 会場：A（232）

テーマ：「Nature Positive を確実に実現する自然再生・緑化を目指して」（研究集会5）

(4) 緑・健康研究部会

①緑・健康部会主催オンラインセミナーを開催予定。

（開催時期、テーマは未定）

②「緑と人の健康」に関するワークショップを予定。

（開催時期、テーマは未定）

(5) 海岸林・沿岸域緑化研究部会

年2回の公開勉強会を継続予定。

(開催時期、テーマは未定)

(6) 第55回大会 企画研究集会

- ① 研究集会1 企画担当：森本淳子・橘 隆一・田中 淳・小川泰浩・小野幸菜・熊田勇斗

開催日時：2024年9月13日（金） 11：00～12：30 会場：A（232）

テーマ：「令和6年能登半島地震復興にむけて—未来の能登を考える—」

- ② 研究集会2 企画担当：今西亜友美・岡 浩平・小宅由似・福井 亘・宮崎直美・村上健太郎

開催日時：2024年9月13日（金） 11：00～12：30 会場：B（242）

テーマ：「OECMで活きる！現行自然共生サイトの現状と新制度」

- ③ 研究集会3 企画担当：平林 聡・加藤 顕・河原典生

開催日時：2024年9月14日（土） 13：15～14：45 会場：A（232）

テーマ：「樹木による生態系サービスを可視化するー i-Tree Eco/Canopy ユーザーワークショップ」

- ⑥ 研究集会6 企画担当：築瀬 知史

開催日時：2024年9月14日（土） 15：00～16：30 会場：B（242）

テーマ：「技術交流会 何故、健全な樹木を伐ってはいけないか？」

(現在活動中の研究部会)

斜面緑化研究部会 都市緑化技術研究部会 生態・環境緑化研究部会

乾燥地緑化研究部会 積雪寒冷地緑化研究部会 緑・健康研究部会

生物多様性緑化研究部会 海岸林・沿岸域緑化研究部会

3. シンポジウム

- (1) 第55回大会公開シンポジウム

開催年月日：2024年9月13日（金） 14：30～17：30

会場：東京農業大学 横井講堂

テーマ：「ヒトが生み出し・つなぐ Tokyoのみどり」

- (2) その他、企画シンポジウムの開催を予定。

4. 現地見学会

- (1) 第55回大会現地見学会 「nature positive 織りなす都市・Tokyo」

開催年月日：2024年9月12日（木）

見学場所：東京都の水源林と地産材活用の取り組み、大手町の森

- (2) 能登半島にて現地検討会を開催予定

テーマ：「能登半島地震による影響と自然再生」

開催年月日：2024年10月12日（土）、13日（日）

令和6年能登半島地震の影響や自然再生の取り組みを視察し、意見交換を行う。

- (3) その他、現地見学会の開催

5. 緑化工セミナー

学会諸活動を PR すること、学生や若手に活動内容を積極的に伝え、当学会の魅力を伝えることを目的として「緑化工セミナー」を企画・開催。基本的に CPD ポイントの付与を予定。

(1) 「未来の緑化工セミナー」(新博士、若手による研究紹介) 企画担当：松本 浩理事、倉本 宣理事

実施方法：オンライン (Zoom ミーティング)

① 未来の緑化工セミナー第3回 テーマ：「都市域の緑化空間における生物多様性」

開催日：2024年8月26日(月) 話題提供者：宮本脩詩氏、高林 裕氏

CPD ポイント：1.5

② 未来の緑化工セミナー第4回以降

話題提供者(決定済み)：宮崎直美氏、阿部建太氏、西野文貴氏、小川泰浩氏により、2024年10月から2025年7月に数回に分けて実施。

その他、随時検討して実施予定。

(2) 「技術を学べるセミナー」(緑化技術に関する発表・セミナー・緑化技術交流会)

(3) 「研究部会セミナー」(研究部会の活動内容をわかりやすく紹介)

6. 学会誌の発行：4回発行予定

(1) 第50巻1号：令和6年8月31日発行 170 ページ (第55回大会特集号)

(2) 第50巻2号：令和6年11月末 発行予定

(3) 第50巻3号：令和6年2月末 発行予定

(4) 第50巻4号：令和6年5月末 発行予定

・第50巻(2024年度刊行)は移行期間とし、従来通り1~4号を編成し、全文PDFも学会HPにて公開する。第51巻以降は、「大会号」と「通常号」の2号編成として、大会号以外は採択が決まった原稿からJ-Stageに即時公開する発行案について、引き続き編集部会および理事会にて検討する。

7. 学会誌の電子化に伴う学会活動・運営 (デジタル改革ワーキンググループ)

(1) 学会誌およびコミュニティレターサイトの運営

コミュニティレターサイトを新規作成する。外注によるサイト構築の後、会員による更新運営を行う。

(2) コミュニティレターの発行

8. 英文誌 Landscape and Ecological Engineering (LEE) の発行

4回発行予定：Vol. 20 (4), Vol. 21 (1)~(3)

9. 学会賞の授与

令和6年度日本緑化工学会賞の授与 (令和7年総会にて授与予定)

10. CPD

第55回日本緑化工学会大会の公開シンポジウム及び研究集会、現地見学会を森林・自然環境技術教育センター (JAFEE) のCPDプログラムとして登録し、CPD ポイントを付与する。

緑化工セミナー等に、必要に応じてCPDプログラムとして登録し、CPD ポイントを付与する。

11. ICLEE2024 大会（ICLEE 設立 20 周年記念大会）

開催年月日：2024 年 10 月 4 日（金）～6 日（日）

開催地：九州工業大学（福岡県北九州市）

発表題数：167 題（口頭発表 92 件、ポスター発表 75 件）

日本緑化工学会 ICLEE2024 実行委員会（森本委員長ほか 6 名）が運営参加。

12. 情報公開・広報・交流事業

(1) ホームページ及び会員ブログの運営（総務部会）

(2) 会員向け連絡「ニュースメール」の配信、情報管理と公開（総務部会）

(3) メーリングリスト green-if の運営（情報共有委員会）

13. その他

(1) 日本学術会議への参加協力及び活動

(2) 防災学術連携体における活動

① 総会、WEB 研究会及び連絡会に参加予定。

② 防災学術連携体の中で日本緑化工学会が参加できる内容を告知、随時対応。

(3) 日本農学会への加盟

2024年度 予算案

(2024年 8月 1日 ～ 2025年 7月31日)

日本緑化工学会

	費 目	予算額 (A)	前年度 決算額 (B)	差 額 (A-B)	対予算割合 (A/B ×100)	摘 要
収入 の 部	正会員費	4,420,400	4,420,400	0	100.0	入金 553名 / 583名 (@8000)
	賛助会員費	1,855,000	1,855,000	0	100.0	入金 53名 / 53名 (@35000)
	購読会員費	-	272,000	-	-	廃止
	学生会員費	184,000	182,000	2,000	101.1	入金 46名 / 70名 (@4000)
	入会登録料	31,500	32,900	-1,400	95.7	入金 45名 / 一名 (@700)
	英文誌購読料	26,520	26,520	0	100.0	
	投 稿 料	400,000	480,000	-80,000	83.3	Vol.51-1 ～ Vol.51-4 分
	広 告 料	850,000	1,300,000	-450,000	65.4	電子広告、コミュニティーレター広告 [今年度から変更]
	雑 収 入	1,000,000	809,468	190,532	123.5	大会事務局経費 +200、 別刷・BN販売収入、著作権使用料、J-Stage有料閲覧費、利息等
	小 計	8,767,420	9,378,288	800,788	93.5	
	繰 越 金	7,652,157	5,722,558			
	合 計	16,419,577	15,100,846	800,788	92.0	
支 出 の 部	会 議 費	150,000	0	150,000	-	
	旅費交通費	1,500,000	50,460	1,449,540	2,972.7	理事会交通費、対面開催3回、他はWeb会議・メール会議
	事務人件費	800,000	465,380	334,620	171.9	口座振替システム基本料金、HP・ML管理費、サーバレンタル料 [今年度限り] バックナンバー掲載 400、サイト修正 50
	通 信 費	300,000	365,064	-65,064	82.2	会費請求書発送費、電話・FAX料、Zoomライセンス(2契約)
	事務用品費	100,000	79,662	20,338	125.5	学会賞状・副賞、総務部会事務用品費
	学会誌刊行費	3,000,000	4,308,315	-1,308,315	69.6	投稿査読等システム・J-stage掲載料、 冊子体印刷製本発送、投稿手数料補助費、コミュニティーレター 500
	英文誌出版分担金	165,000	163,200	1,800	101.1	英文誌出版分担金
	大会補助費	200,000	0	200,000	-	大会開催補助費
	研究部会補助費	700,000	0	700,000	-	部会活動費補助
	委員会等経費	400,000	0	400,000	-	会議室使用料・旅費、編集委員会(通常号)・編集委員会(大会号論文部 門・技術報告部門)
	事務委託費	2,860,000	1,850,308	1,009,692	154.6	学会事務業務委託費(会員入退会、会費徴収、会計事務業務等) [3ヶ年程度] 会員管理システム構築 1000
	諸会費	230,000	160,000	70,000	143.8	JABEE、JAFEE、防災学術連携体、[新規]日本農学会 70
	災害特別対策費	100,000	0	100,000	-	災害調査費用 他
	雑費	30,000	6,300	23,700	476.2	振込手数料 他
	基金積み立て	0	0	0	-	
	小 計	10,535,000	7,448,689	3,086,311	141.4	
	予備費	5,884,577	7,652,157	7,146,914	79.0	決算時予備費は0、数字は繰越金
	合 計	16,419,577	15,100,846	800,788	108.7	

2024年9月13日

日本緑化工学会副会長兼経理部会長
梁瀬 知史

2024年度 基金予算案

(2024年 8月 1日 ～ 2025年 7月31日)

日本緑化工学会

	費 目	予算額 (A)	前年度 決算額 (B)	差額 (A-B)	対予算割合 (A / B × 100)	摘 要
収入 の 部	前期より繰り越し	1,130,029	1,130,019	10	100.00	
	利子収入	10	10	0	100.00	昨年並と想定
	一般会計より戻し入れ	0	0	0	-	新規積み立て
	合 計	1,130,039	1,130,029	10	100.00	
支出 の 部	一般会計へ繰り入れ	0	0	0	-	
	一般会計へ貸し出し	0	0	0	-	
	合 計	0	0	0	-	

次期繰越金	1,130,039	1,130,029
-------	-----------	-----------

第六号議案

役員の一部改選（案）

下記の通り 役員の変更を提案致します。

変更年月日：令和6年9月13日

就任役員

役 職	氏 名	所 属	摘 要
理 事	今井 祥之	株式会社高速道路総合技術研究所	後 任

退任役員

役 職	氏 名	所 属	摘 要
理 事	篠田 貴	株式会社高速道路総合技術研究所	異 動

会員の異動

(令和6年5月1日～令和6年10月31日)

《入会》	正会員	8名
氏名	勤務先	
鈴木 貴浩	株式会社森林テクニクス	
蔵谷 樹	日特建設株式会社	
家根橋 圭佑		
下田 政博	東京農工大学大学院	
今井 祥之	株式会社高速道路総合技術研究所	
石部 由季乃		
石丸 巧	URコミュニティ	
鈴木 晴美	株式会社地域環境計画	

《入会》	賛助会員	2社
社名		
株式会社構研エンジニアリング		
株式会社スペース・グリーン		

《入会》	学生会員	11名
氏名	勤務先	
石原 龍太	信州大学大学院	
五味 あずさ	千葉大学	
佐久間 楽奈	東京農業大学大学院	
鈴木 ひかり	山形大学大学院	
村上 悠一郎	北見工業大学	
大野 千星織	東京農業大学	
平山 晴庵	京都大学大学院	
佐々木 綾香	東京農業大学大学院	
植地 俊輔	京都府立大学大学院	
畠中 陽菜子	東京農業大学	
安藤 穂歩	香川大学	

《会員種別変更 学生会員→正会員》	1名
氏名	勤務先
甲野 耀登	東京大学大学院
武藤 恵	
田村 和也	

《退会》	正会員	47名
上村 恵也(株式会社ネクスコ・エンジニアリング東北),池ヶ谷 兼雄,境 慎二郎(京都大学フィールド科学教育研究センター),宇津木(林) 栄津子,北野 茂夫,西脇 亜也(宮崎大学),稲垣 栄洋(静岡大学大学院),田中 規夫(埼玉大学大学院),石田 仁,川手 美富(株式会社早野組),落 修一((公財)日本下水道新技術機構),下園 寿秋,木村 仁,竹原 明秀(岩手大学),井野 友彰(国土防災技術株式会社),清水 一(地独)北海道立総合研究機構,名倉 隆,濱野 周泰(東京農業大学),飯塚 和也(宇都宮大学),長友 大幸,大石 善隆(福井県立大学),高玉 波夫,佐藤 康弘,石松 一仁,二見 肇彦(ライト工業株式会社),町田 健太,宮浦 徹,浅見 和弘,長野 龍平(株式会社 大林組),佐々木 一成,近藤 晃,大倉 康平,戸田 克稔(神奈川県土整備局),外崎 公知,守谷 栄樹,上田 晋輔,山本 福壽,細木 大輔(新日本設計株式会社),秋山 怜子(株式会社オリエンタルコンサルタンツ),長山 泰秀(全国大学高専教職員組合),高橋 陽一(独立行政法人水資源機構),佐々 佳紀(京都府丹波広域基幹林道建設事務所),中村 弘和(中村環境事務所),槌尾 健(株式会社竹中工務店),香口 成美(近江花勝造園株式会社),小椋 佳(県北農林事務所),服部 紘依(鹿島建設株式会社)		

《退会》	学生会員	5名
馬 思亮(鳥取大学大学院),鍛冶元 雅史(北見工業大学),山本 勇輝(鳥取大学大学院),伊藤 直也(中央大学),中井 健太(北見工業大学)		

賛 助 会 員

2024年11月11日現在

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL FAX
会津法面（株）	967-0600	福島県南会津郡南会津町山口字欠河原 1784	0241-72-2624
（有）アルファグリーン	231-0023	神奈川県横浜市中区山下町 99-1-207 http://www.a-green.org	045-650-5360 045-650-5365
（株）大林組技術研究所	204-8558	東京都清瀬市下清戸 4-640 http://www.obayashi.co.jp/	042-495-1111 042-495-0901
（一社）街路樹診断協会	108-0074	東京都港区高輪 3-4-1 高輪偕成ビル 8階 http://www.gaishin.com	03-6447-7288 03-6450-2274
鹿島建設（株）技術研究所	182-0036	東京都調布市飛田給 2-19-1 http://www.kajima.co.jp/	042-485-1111 042-488-3394
（株）KANSO テクノス	541-0052	大阪府大阪市中央区安土町 1-3-5 http://www.kanso.co.jp/	06-6263-7320 06-6263-7321
共和コンクリート工業（株）	061-1405	北海道恵庭市戸磯 385-36 http://www.kyowa-concrete.co.jp/	0123-34-3366 0123-34-3369
グリーンキャスター事業協同組合	930-0094	富山県富山市安住町 3-14 富山県建設センター1F	076-442-5300 076-442-5322
栗田工業（株）	164-0001	東京都中野区中野 4-10-1 中野セントラルパークイースト http://www.kurita.co.jp/	03-6743-5000
（株）ケイエフ	590-0021	大阪府堺市堺区北三国ヶ丘町 8-7-7 http://www.norimen.com/	072-232-6060 072-232-6008
小岩井農牧（株）	020-0507	岩手県岩手郡雫石町 26 地割字丸谷地 36-1 http://www.koiwai.co.jp/	0196-92-3148 0196-92-3159
小岩金網（株）	111-0035	東京都台東区西浅草 3-20-14 http://www.koiwa.co.jp/	03-5828-8828 03-5828-7693
（株）構研エンジニアリング	060-0034	札幌市中央区北 4 条東 4 丁目 1 番地 1 創成クロス https://www.koken-e.co.jp/company/	011-522-7682 011-522-7692
（株）高速道路総合技術研究所	520-3121	滋賀県湖南市西寺 1-1-1 緑化技術センター http://www.ri-nexco.co.jp	0748-77-2124 0748-77-4019
国土防災技術（株）	105-0001	東京都港区虎ノ門 3-18-5 青葉ビル 4F http://www.jce.co.jp/	03-3432-3567 03-3432-3576
サンスイ・ナビコ（株）	103-0025	東京都中央区日本橋茅場町 2-7-1 アソルティ日本橋茅場町 2F http://www.snse.co.jp/	03-5623-3600 03-5623-5554
上毛緑産工業（株）	370-3607	群馬県北群馬郡吉岡町大字小倉 827-87 http://www.jouryoku.com/	0279-54-7723 0279-54-8603
（株）新日本緑化	464-0850	愛知県名古屋千種区今池 2-1-18 http://www.sn-ryokka.co.jp/	052-732-2081 052-741-4175

賛 助 会 員

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL FAX
(株) スペース・グリーン	580-0043	大阪府松原市阿保 5 丁目 7 番 25 号 https://spacegreen.co.jp/	072-331-1103 072-331-1180
(一社) 全国特定法面保護協会	105-0004	東京都港区新橋 5-7-12 丸石新橋ビル 3F http://www.norimen.or.jp/	03-3437-2588 03-3437-2566
大建工業 (株)	101-8950	東京都千代田区外神田 3-12-18 住友不動産秋葉原ビル	03-6271-7799 03-5296-4057
(株) 高特	377-0003	群馬県渋川市八木原 224-14 http://www.takatok.co.jp/	0279-22-2035 0279-23-3913
多機能フィルター (株)	744-0061	山口県下松市葉山 2-904-16 http://takino.co.jp	0833-46-4466 0833-46-4678
田中建設 (株)	034-0012	青森県十和田市東一番町 2-50 http://www.tanaka-net.co.jp	0176-23-3521 0176-25-7011
(株) タニガキ建工	640-0405	和歌山県紀の川市貴志川町岸宮 433 http://k-tanigaki.co.jp	0736-64-8989 0736-64-8889
東京パワーテクノロジー (株)	135-0061	東京都江東区豊洲 5-5-13 豊洲アーバンポイント http://www.tokyo-pt.co.jp/	03-6372-7125 03-6372-4162
東興ジオテック (株)	104-0061	東京都中央区銀座 7-12-7 高松建設ビル http://www.toko-geo.co.jp/	03-3456-8751 03-3456-8752
(株) 東平商会	411-0943	静岡県駿東郡長泉町下土狩 72-1 http://www.tohey.co.jp/	0559-86-8898 0559-87-0047
東邦レオ (株)	170-0004	東京都豊島区北大塚 1-15-5 http://www.toho-leo.co.jp	03-5907-5500 03-5907-5510
中日本ハイウェイ・エンジニア リング東京 (株)	160-0023	東京都新宿区西新宿 1-23-7 新宿ファーストウエスト 9F https://www.c-nexco-het.jp/	03-5339-1711 03-5339-1719
(株) 西村建設	861-4703	熊本県下益城郡砥用町大字畝野 2900	0964-48-0208 0964-48-0513
(株) ニチノー緑化	103-0001	東京都中央区日本橋小伝馬町 14-4 岡谷ビルディング 6F http://www.nichino-ryokka.co.jp	03-3808-2281 03-3808-2360
(株) 日さく	330-0854	埼玉県さいたま市大宮区桜木町四丁目 199-3 https://www.nissaku.co.jp/	048-644-3911 048-644-3958
日新産業 (株)	501-6002	岐阜県羽島郡岐南町三宅 3-224 http://www.nisshin-sangyo.com	058-247-7529 058-247-7359
日特建設 (株)	103-0004	東京都中央区東日本橋 3-10-6 平和東日本橋ビル 6F http://www.nittoc.co.jp/	03-5645-5050 03-5645-5051
日本乾溜工業 (株)	812-0054	福岡県福岡市東区馬出 1-11-11 http://www.kanryu.co.jp/	092-632-1003 092-632-1023

賛 助 会 員

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL FAX
日本基礎技術（株）	151-0072	東京都渋谷区幡ヶ谷 1-1-12NKG 東京ビル http://www.jafec.co.jp/	03-5365-2500 03-5365-2521
日本植生（株）	708-8652	岡山県津山市高尾 573-1 http://www.nihon-shokusei.co.jp/	0868-28-0251 0868-28-4410
日本特殊緑化協会	062-0032	北海道札幌市豊平区西岡 2 条 12 丁目 2 番 15 号 http://www.jsra-web.com/	011-584-3016 011-584-3030
日本緑化工協会	125-0042	東京都葛飾区金町 5-35-5-206 http://www.ryokkakou.com/	03-5660-1664
（株）ネクスコ・エンジニアリング 東北	980-0013	宮城県仙台市青葉区花京院 2-1-65 花京院プラザ 13F http://www.e-nexco-engito.co.jp/	022-713-7291 022-721-1259
（株）ネクスコ東日本エンジニア リング	116-0014	東京都荒川区東日暮里 5-7-18 コスモパークビル 3F http://www.e-nexco-engi.co.jp	03-3805-7911 03-3805-7902
法面プロテクト（株）	520-0232	滋賀県大津市真野 6-14-11 http://www.norimen-protect.com/	077-571-3521 077-571-3522
（株）フジタ技術センター	243-0125	神奈川県厚木市小野 2025-1 https://www.fujita.co.jp/	046-250-7095 046-250-7139
富士見工業（株）	422-8026	静岡県静岡市駿河区富士見台 1 丁目 21 番 22 号	054-283-2933 054-283-2969
紅大貿易（株）	101-0048	東京都千代田区神田司町 2-8-3 第 25 中央ビル http://www.benidai.co.jp/	03-3256-0551 03-3254-7126
（一社）北海道造園緑化建設業協会	060-0051	北海道札幌市中央区南一条東 1 丁目 2 番地 1 太平洋興発ビル 2 階 http://www.hokuzoukyou.or.jp/	011-221-4451 011-232-5611
前田工織（株）	105-0011	東京都港区芝公園 2-4-1 芝パークビル A 館 12F http://www.maedakosen.jp/	03-6402-3944 03-6402-3945
（株）マキノグリーン	742-0031	山口県柳井市南町 7-2-6 http://www.makino-green.com/	0820-23-4082
山形開発工業（株）	596-0805	大阪府岸和田市田治米町 75 http://www.ymgt.co.jp	072-441-3602 072-441-3838
雪印種苗（株）	261-0002	千葉県千葉市美浜区新港 7-1 http://www.snowseed.co.jp/	043-241-7732 043-238-1383
ライト工業（株）	102-8236	東京都千代田区九段北 4-2-35 http://www.raito.co.jp/	03-3265-2551 03-3265-0879
（株）緑生研究所	182-0026	東京都調布市小島町 2-40-10 桐生ビル 2F http://www.ryokusei-ri.co.jp	0424-99-7211 0424-87-4334
ロンタイ（株）	570-0011	大阪府守口市金田町 3-1-11 http://www.rontai.co.jp	06-6902-9401 06-6905-9070

編集後記

試行版を担当された東京農大の橘先生から引き継ぎ、創刊号（第1号）の編集を担当しました。新しいものを作り出すことも大変ですが、それを継続して発展させていくことはもっと大変ですよね。会員の皆さんにもご協力いただき、コミュニティレター（CL）が立派に育っていくことを楽しみにしています。

CLが育つためには、とにもかくにも原稿が集まるのが肝心です。会員の皆さんからの原稿をお待ちしていますので、新会員の自慢や緑地探訪など執筆いただける方はぜひ岡までご連絡ください。

なかなか原稿が集まらない場合は・・・皆さんにお声がけすることもあるかもしれません。学会誌の編集

を兼務しているため、会員の皆さんにお願いする機会が日頃より多いのですが、依頼をお断りされるケースもあります。これにも徐々に慣れてきましたので、別の機会に再び依頼するなど、私も少しだけたくましくなってきました。CLの執筆依頼があった際には、お時間に余裕がある際はぜひとも前向きにご検討ください！一度お断りされても、別の機会にちゃっかり依頼してしまうかもしれません。その際には呆れることなく・・・前向きにお付き合い頂けると幸いです。このCLを通して、楽しみながら、皆さんとの交流を深めていけることを楽しみにしています。

（岡 浩平, k.oka.gw@cc.it-hiroshima.ac.jp）

複写される方へ（これまでの本紙同様に、学術著作権協会に追加委託する予定です）

本学会は有限責任中間法人 学術著作権協会(学著協)に複写に関する権利委託をしていますので、本誌に掲載された著作物を複写したい方は、学著協より許諾を受けて複写して下さい。但し、社団法人日本複写権センター(学著協より複写に関する権利を再委託)と包括複写許諾契約を締結されている企業の社員による社内利用目的の複写はその必要はありません（*社外頒布用の複写は許諾が必要です）。

権利委託先:有限責任中間法人学術著作権協会

〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-41 乃木坂ビル 3 階

電話:03-3475-5618 FAX:03-3475-5619 E-mail:info@jaacc.jp

注意:複写以外の許諾(著作物の転載・翻訳等)は学著協では扱っていませんので、本学会までご連絡ください。

アメリカ合衆国において本書を複写したい場合は、次の団体に連絡してください。

Copyright Clearance Center, Inc.

22 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA

Pone 1-978-750-8400 Fax.1-978-646-8600

日本緑化工学会 コミュニティレター Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第1号 (No.1)

令和7年1月27日 発行 (January 2025)

編集兼発行人 岡 浩平

発行所 日本緑化工学会

〒113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

Tel. 03-3818-8281 Fax. 03-3818-8282

事務局: E-mail: office@jsrt.jp
